

# 若江遺跡第 65 次発掘調査報告

—共同住宅建設に伴う—

1999

財団法人 東大阪市文化財協会

## はじめに

若江遺跡は東大阪市および、旧河内国のほぼ中央に位置します。市内では約130の遺跡が確認されておりますが、若江遺跡は最も数多くの発掘調査が行われてきた遺跡であります。

これまでの64次におよぶ発掘調査で、弥生時代から江戸時代にかけての、人々の暮らしぶりが明らかになりつつあります。

今回の第65次発掘調査でも、弥生時代から江戸時代に至る遺物・遺構を多量に検出し、貴重な成果をあげることができました。本書が東大阪市の歴史を解明してゆく上での一助となれば幸いです。

最後に、現地調査および資料整理にあたり、ご尽力いただいた関係者の方々に、厚く御礼申し上げます。

平成11年11月

財団法人 東大阪市文化財協会

理事長 日吉 亘

## 例言

1. 本書は、平成8年度に実施した共同住宅建設に伴う若江遺跡第65次発掘調査の報告書である。
2. 現地調査および整理作業は、財団法人東大阪市文化財協会が柚本チエ氏の委託を受けて実施した。
3. 現地調査は、平成8年4月3日から5月1日まで、財団法人東大阪市文化財協会井上伸一が担当した。整理作業は平成11年11月30日まで行った。
4. 本書の執筆は井上が行った。
5. 遺構写真は井上が撮影した。また遺物写真は、スタジオG.F.プロに委託して撮影した。
6. 土色は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に準拠した。
7. 現地調査ならびに整理作業には、以下の補助員が従事した。  
今井喬子 榎本雅則 北野正樹 永田明徳 本田けい子

## 本文目次

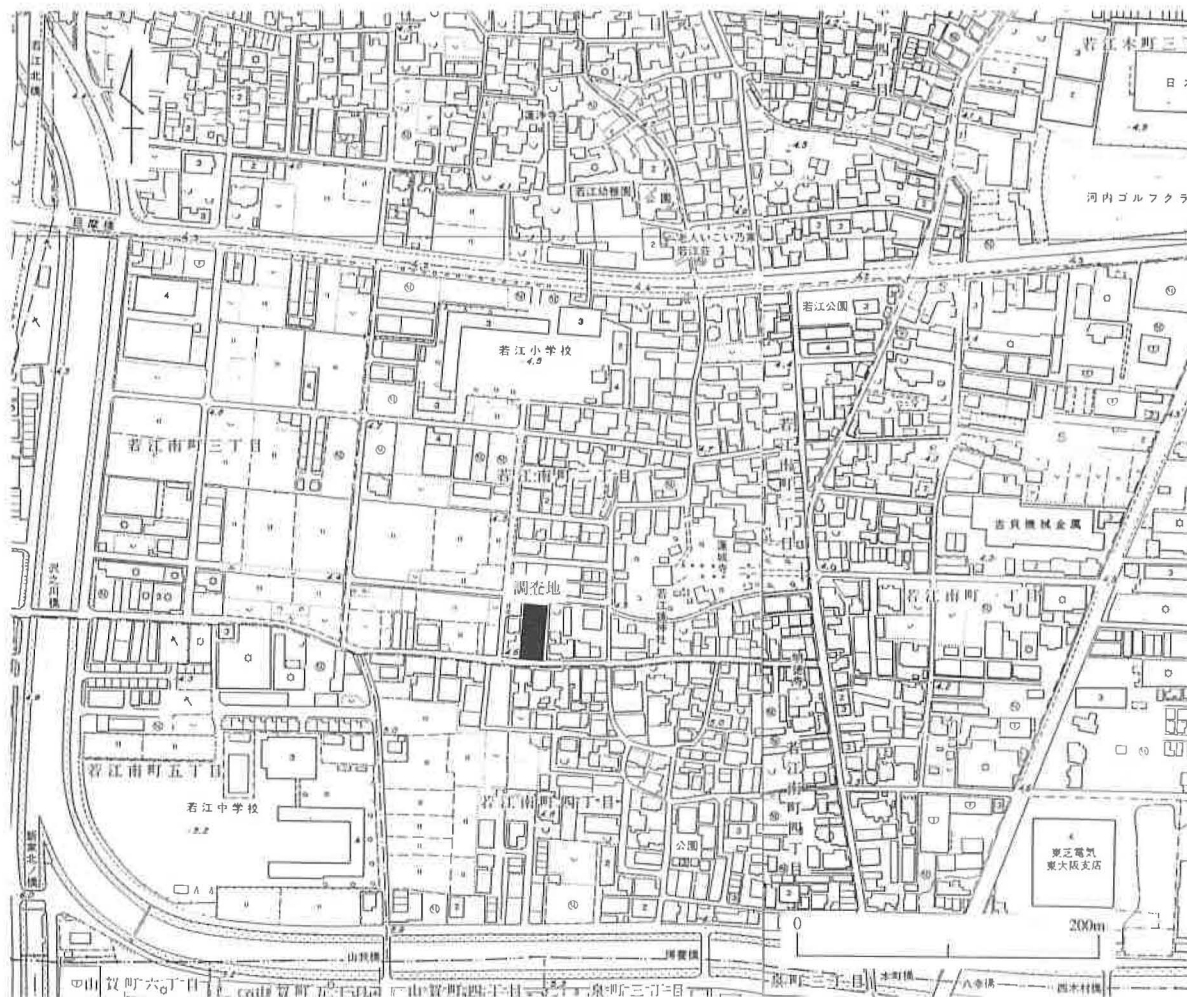
I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の方法	4
IV. 調査の概要	4
V. 出土遺物	13
VI. まとめ	21

## I. 調査に至る経過

東大阪市若江本町・若江北町・若江南町一帯には弥生時代から江戸時代に至る若江遺跡が広がっている。当遺跡は昭和9年の第二寝屋川改修工事の際に弥生時代～中世の土器が出土して注目されるようになり、昭和47年に若江小学校舎増築工事に伴い第1次発掘調査が実施された。それ以来道路拡幅・ガス管埋設・共同住宅建設などと、平成2年度以降若江地区で集中的に下水道埋設工事がなされ、これまでに64次におよぶ発掘調査が行われてきた。

今回、若江遺跡内の若江南町2丁目58-2番地で共同住宅建設の計画が持ち上がり、東大阪市教育委員会が平成7年11月24日に建設予定地内で試掘調査を実施したところ、近世の溝、中世の遺物包含層と溝・ピット、時期不明の溝を検出し、少量の遺物が出土した。このため、共同住宅建設に先立つ事前の発掘調査が必要との見解が教育委員会より原因者に示され、協議を重ねることとなった。

その結果、杭打ちによって埋蔵文化財が影響を受ける地点を中心に7トレンチ、合計面積80.6m<sup>2</sup>を対象とした若江遺跡第65次発掘調査を、財団法人東大阪市文化財協会が委託を受けて実施することとなった。なお現場調査は平成8年4月3日から5月1日まで（実働16日）行った。



第1図 調査地位置図 (1/5000)



## II. 位置と環境

若江遺跡は東大阪市若江本町・若江北町・若江南町一帯に東西700m、南北1000mの範囲で広がる弥生時代から江戸時代に至る複合遺跡である。河内平野のほぼ中央に位置し、標高4～5mの自然堤防上に立地している。

本遺跡周辺に集落が形成されはじめるのは、河内湾が旧大和川の堆積作用によって潟から湖へと変化する縄文時代晩期から弥生時代前期頃と考えられている。南に隣接する山賀遺跡では縄文時代晩期の遺物包含層や足跡、弥生時代前期の掘立柱建物等が検出されている<sup>(1)</sup>。北に隣接する瓜生堂遺跡も前期には集落が形成されたようで、中期の方形周溝墓等が確認されている<sup>(2)</sup>。若江遺跡では府道大阪東大阪線沿いに弥生時代後期の方形周溝墓、水田畦畔が検出されており<sup>(3)</sup>、中期に遡ると思われるピットも確認されている<sup>(4)</sup>。

古墳時代に入ると河内湖の汀線は大きく北へ前進し、前期には西岩田遺跡にも集落が形成される<sup>(5)</sup>。また中期には巨摩廃寺遺跡・山賀遺跡で古墳が造成される<sup>(6)</sup>。若江遺跡では南部で前期のピット<sup>(7)</sup>、府道大阪東大阪線沿いで中期～後期の溝、土塼等が確認されている<sup>(8)</sup>。

奈良時代に入ると、和銅2年(709)「弘福寺田畠流記帳」<sup>(9)</sup>を初見として明治時代初期まで「若江郡」が存続していること、元慶年間(877～885)の「尊意贈僧正伝」<sup>(10)</sup>以降、文明14年(1482)写筆の「長祿記」<sup>(11)</sup>まで郡寺と思われる「若江寺」が文献上散見されることから、当遺跡内に郡衙が創建されたものと推測されている。瓜生堂遺跡では平安時代前期の井戸が確認されているが<sup>(12)</sup>、現在のところ当遺跡では奈良時代～平安時代前期の遺物は出土するものの、若江郡衙、若江寺関連の遺構は確認されていない。

若江城は「河内志」<sup>(13)</sup>および「津川本島山系図」<sup>(14)</sup>から南北朝期に築かれたと考えられており、以後当城は河内国守護畠山氏の守護所となった<sup>(15)</sup>。その後畠山政長と義就間の家督相続をめぐる若江城争奪戦は、文正2年(1467)上御霊社の合戦に山名宗全、細川政元以下の諸領主をまきこみ応仁の大乱へと発展していった。この間に守護所としての機能は高屋城に移転していったと考えられていれる。

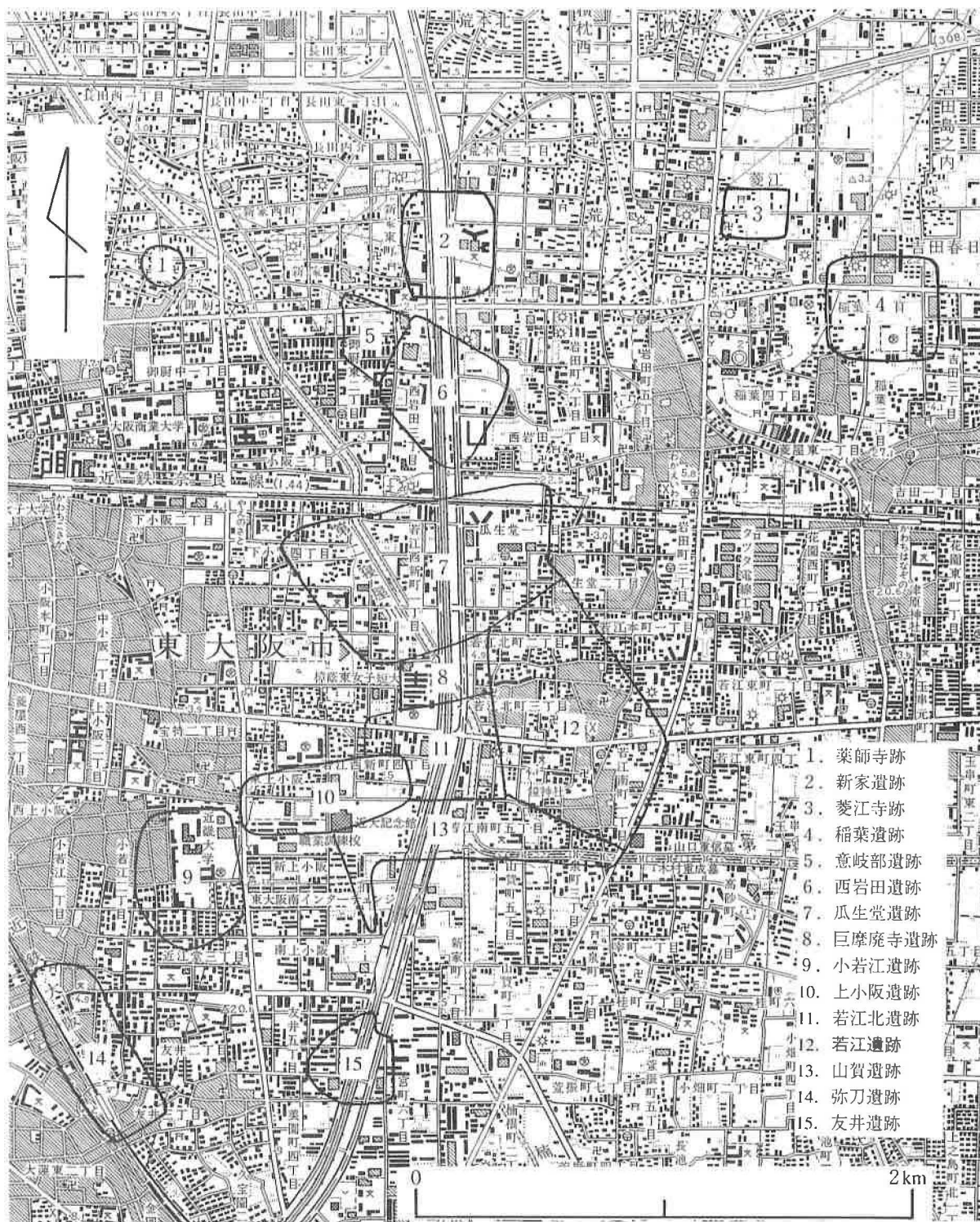
足利義昭を奉じて入京した織田信長が永祿11年(1568)に畿内を平定すると、若江城主三好義継は河内国北半の守護となり、当所は再び守護所となった。しかしその後間もなく信長と対立し、天正元年(1573)7月槇嶋城の戦いで破れた義昭は、羽柴秀吉の警固のもと義継の若江城へ入り、堺を経て紀州へ渡り室町幕府は終わりを告げた。

同年11月に三好義継を攻め滅ぼした信長は多羅尾綱知・池田教正・野間左吉の若江三人衆に若江城を預け置き、信長自身も石山本願寺攻めの際にしばしば宿所として利用した。天正8年(1580)8月2日石山合戦の終結後、12月16日までに若江城は織田信長によって破却されたと推測されており、翌年のルイス・フロイスの「若江の中央を通ったが、此所には今城もなく、唯多数の住民が居る町のみがあった」との書翰はそれを傍証している<sup>(16)</sup>。

「長祿寛正記」にみられる「口ニツニ拵へ、所々掘切テ搔楯ヲカキ。逆茂木

ヲ引待カケ。」<sup>(17)</sup> といった若江城の城郭構造が、近年の発掘調査による堀・土塁・逆茂木・石垣・土橋・埦立建物などの城郭関連遺構の検出で明らかになりつつある<sup>(18)</sup>。現在のところ若江城の本丸は若江幼稚園付近と考えられている。

江戸時代には、若江は幕府によって村方として掌握されており、寛永21年(1644)の家数改めでは224戸におよび、大集落を形成していた<sup>(19)</sup>。



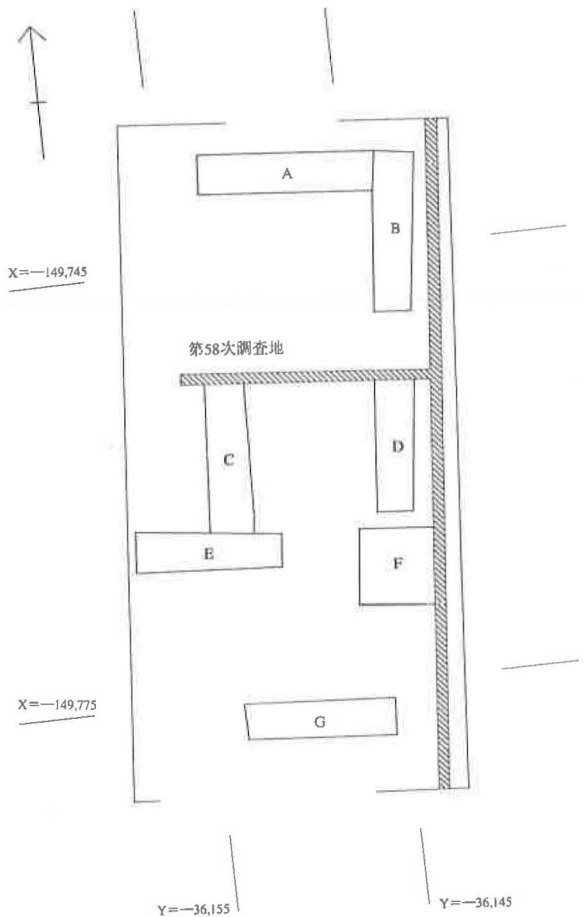
第2図 遺跡周辺図 (1/25000)

### III. 調査の方法

第65次の調査地は東大阪市若江南町2丁目58-2番地で、建設省の告示による国土座標第VI系の $Y = -36,160 \sim -36,140$ 、 $X = -149,740 \sim -149,780$ の範囲におさまっている。本調査地北側の水路を挟んだ市道では第61次調査<sup>(20)</sup>、調査地内では第58次調査<sup>(21)</sup>がそれぞれ下水道管渠築造工事に伴って実施されている。

今回は共同住宅建設にともなう、基礎杭打設等で埋蔵文化財が破壊される部分を中心に、第3図のようにA～Gと仮称する7地区について調査を実施した。各面積はA地区 $12.6\text{m}^2$ 、B地区 $10.4\text{m}^2$ 、C地区 $10.4\text{m}^2$ 、D地区 $10.4\text{m}^2$ 、E地区 $10.4\text{m}^2$ 、F地区 $16\text{m}^2$ 、G地区 $10.4\text{m}^2$ で調査地全体の合計面積は $80.6\text{m}^2$ である。

発掘調査は先に行われた試掘調査の結果に基づいて現地表下 $0.6\text{m}$ までを重機によって掘削した。その後地表下 $1.8\text{m}$ までを重機を併用しながら人力掘削し、遺構の精査を行った。また検出できた遺構については各地区ごとに名称を設定した。各遺構実測図は磁北を基準としているため、国土座標上の位置関係は第3図を参照していただきたい。



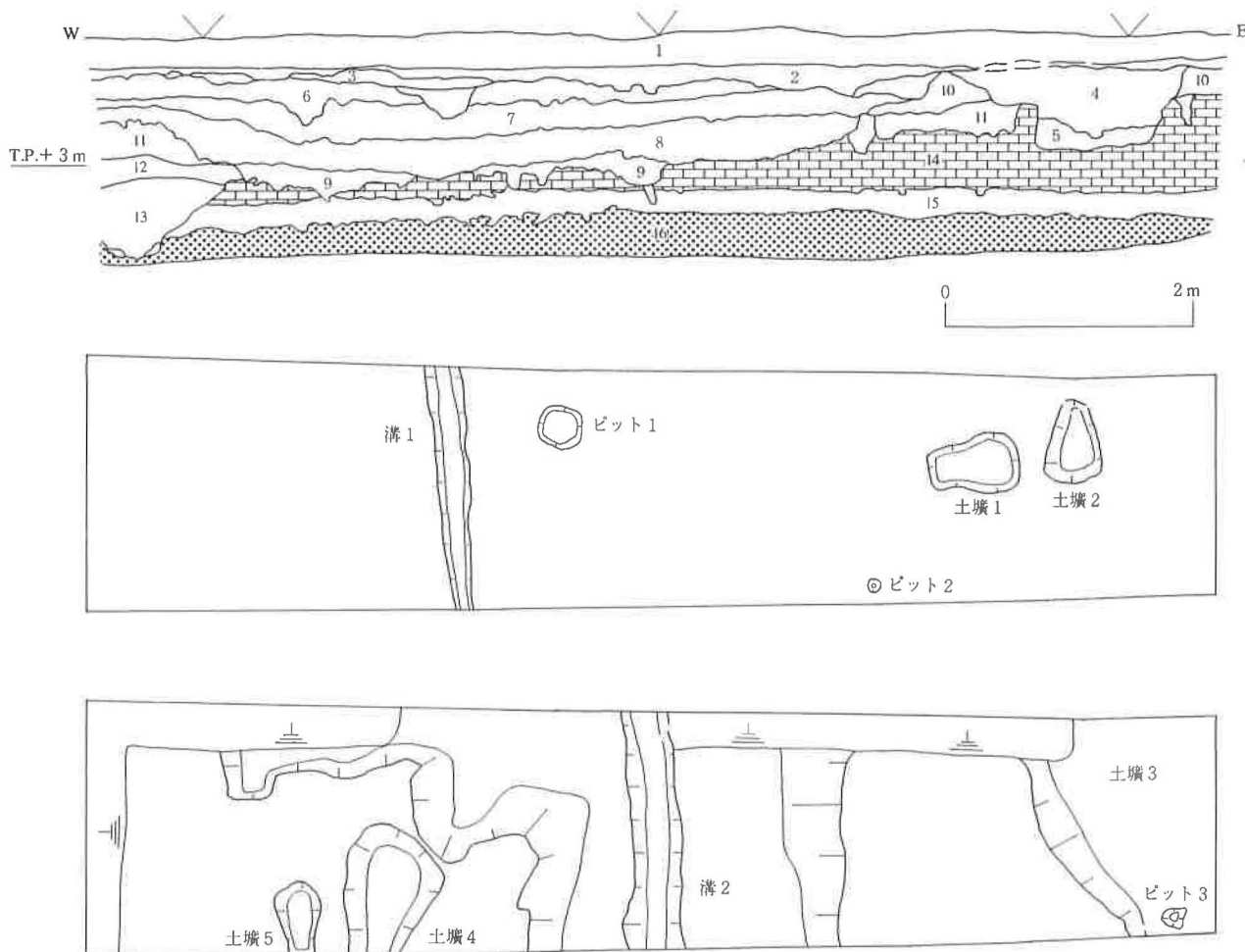
第3図 調査地地区割り図 (1/400)

### IV. 調査の概要

#### 1 A地区の層位と遺構

第2・3層は近世の遺物を含み、下面で近世の遺構を検出した。第7・8層は溝2内埋土層で16世紀後半の遺物を含み、第9層は溝2内堆積層である。第14層は古墳時代前期の堆積層、第15層は弥生時代後期、第16層は弥生時代中期の堆積層である。調査区西端の断面では古墳時代前期～溝2掘削の間に使用された、北東から南東に延びる溝状遺構が確認できた。

溝1、ピット1・2、土壙1～3は近世の遺構である。それぞれの深さは溝1が $32\text{cm}$ 、ピット1が $9\text{cm}$ 、ピット2が $4\text{cm}$ 、土壙1が $7\text{cm}$ 、土壙2が $14\text{cm}$ 、土壙3が $68\text{cm}$ である。土壙3はB地区へと広がっていた。



- |                                |                                  |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1. 盛土                          | 2. 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂～中礫混じり粘土      |
| 3. 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂～中礫混じり粘土    | 4. 2.5Y6/3にぶい黄色中粒砂～中礫混じり粘土       |
| 5. 10YR5/3にぶい黄褐色粘土 粗粒砂～細礫微量混じる | 6. 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂～中礫混じり粘土      |
| 7. 2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂～中礫混じり粘土      | 8. 5Y5/1灰色中粒砂～中礫混じり粘土            |
| 9. 7.5GY4/1暗緑灰色粘土 粗粒砂～細礫少量混じる  | 10. 5Y5/1灰色中粒砂～中礫混じり粘土           |
| 11. 2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂～中礫混じり粘土     | 12. 10G5/1緑灰色極細粒砂～粘土 細礫微量混じる     |
| 13. 7.5Y4/1灰色細粒砂～中礫 下部にシルト混じる  | 14. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 上部にシルト～極細粒砂混じる |
| 15. 5Y2/1黒色粘土 粗粒砂～細礫混じる        | 16. 7.5Y6/1灰色細粒砂～中礫              |

第4図 A地区断面図・遺構平面図 (1/60)

溝2、土壙4・5、ピット3は中世の遺構である。土壙4は深さ34cm、土壙5は深さ15cmである。

溝2は幅208cm、深さ100cmで南北方向に延び、北部では西肩が凹凸をもって北西方向に広がっていた。底部のほぼ中央は南北方向に幅20cm、深さ20cmで一段深く掘り込まれていた。検出した位置関係からG地区の溝に続く可能性がある。出土遺物(第11図、1)から16世紀後半に埋められたものと思われる。

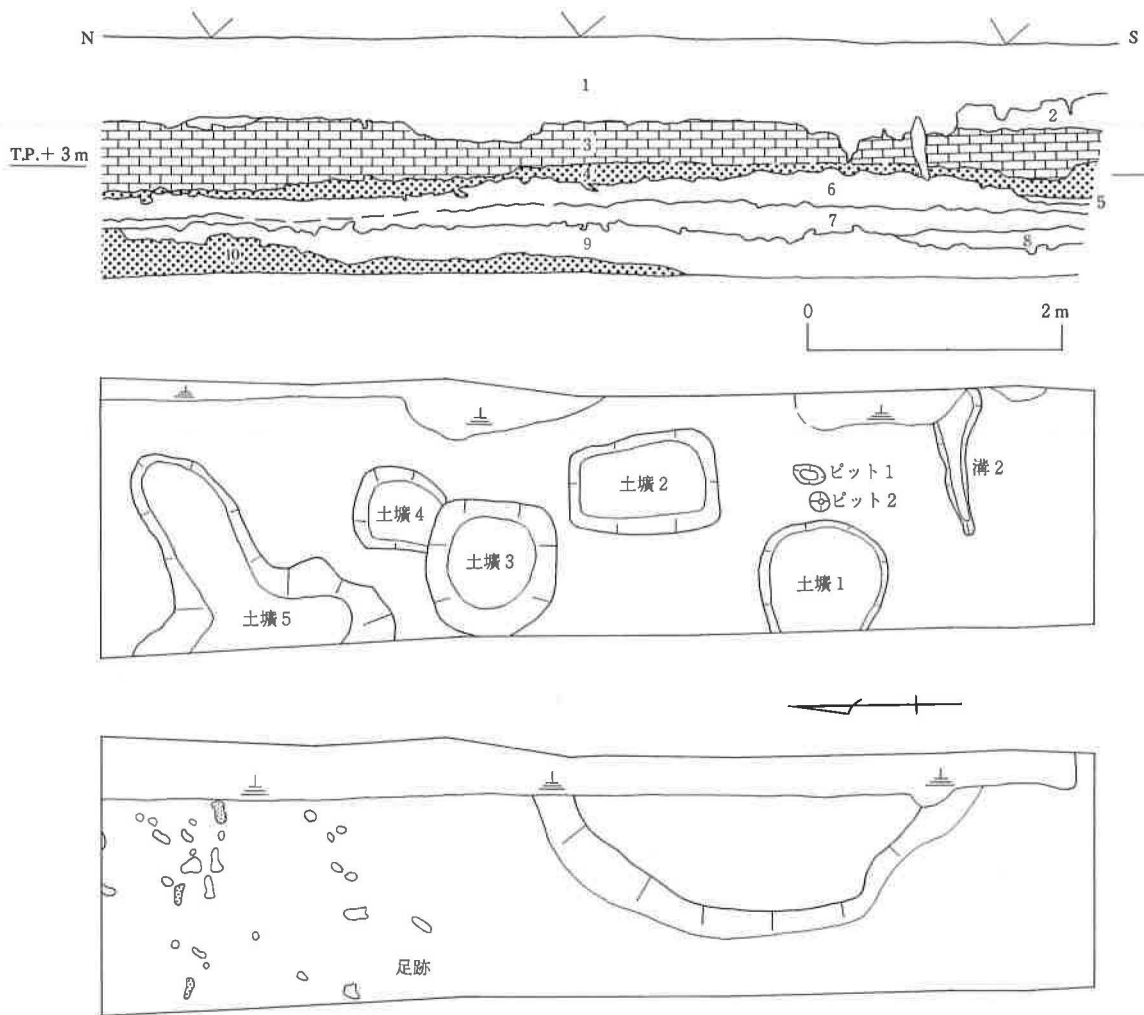
## 2 B地区の層位と遺構

第2層は中世の遺物を含んだ整地層である。第3層は古墳時代前期の遺物(第12図、6～12)を含み、A地区第14層に相当する。上面で中世～近代の

遺構を検出した。第4層は古墳時代初頭の堆積層である。第6・7層は弥生時代後期の遺物（第12図、13～22）を含み、A地区第15層に相当する。上面で足跡を検出した。また第6層は調査区南部で高さ25cm、平面形では半円の高まりを形成していた。第10層は弥生時代中期の堆積層で、A地区第16層に相当する。

土壙1～4、溝は近代、土壙5は近世、ピット1・2は中世の遺構である。ピットの深さはいずれも16cmである。土壙5はA地区土壙3と仮称した遺構が東部へ広がっていたもので、本来単一の遺構である。

調査区の北部では第4層を覆土とする足跡を、第5層上面で検出した。西から東へ向かって、50～55cmの歩幅で人間が歩行していた状況が1例復原できる。



- |                            |                           |
|----------------------------|---------------------------|
| 1. 盛土                      | 2. 5Y6/2灰オリーブ色中粒砂～中礫混じり粘土 |
| 3. 10YR6/6明黄褐色粘土 極細粒砂混じる   | 4. 5Y6/1灰色極細粒砂～細粒砂        |
| 5. 10GY4/1暗緑灰色シルト～粘土       | 6. 5Y4/1灰色極細粒砂～中礫混じり粘土    |
| 7. 5Y3/1オリーブ黒色極粗粒砂～中礫混じり粘土 | 8. 10GY5/1緑灰色シルト～粘土       |
| 9. 5BG5/1青灰色極細粒砂～粘土        | 10. 10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂～中礫   |

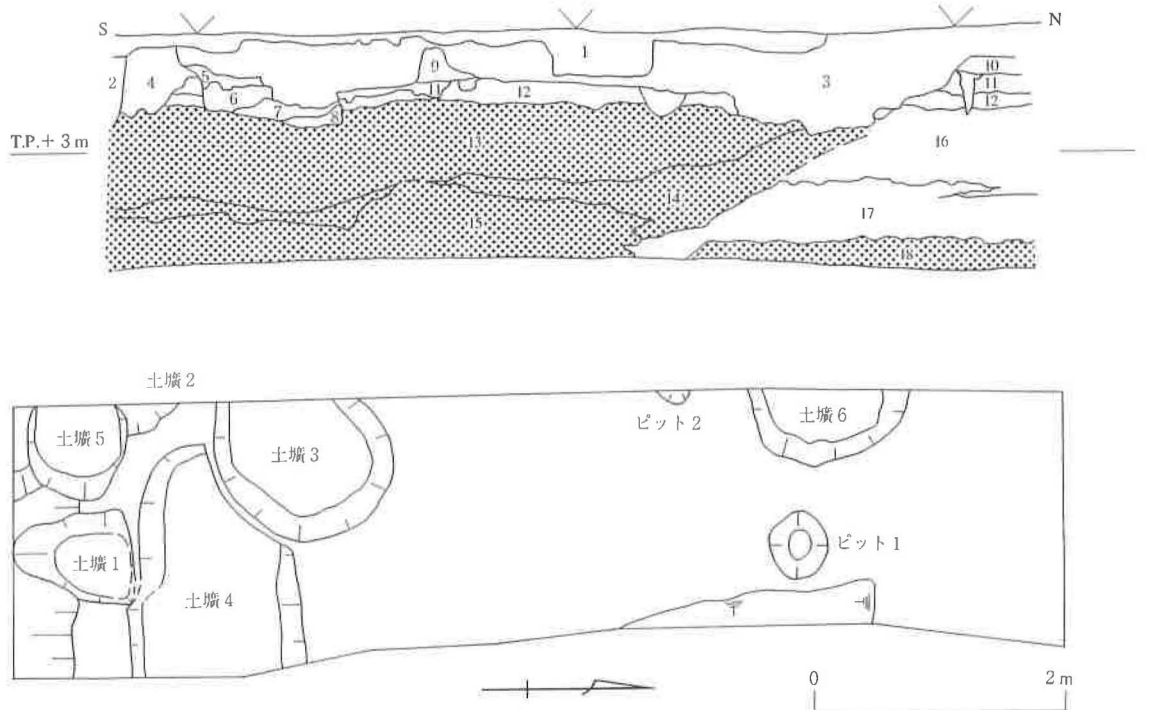
第5図 B地区断面図・遺構平面図 (1/60)

### 3 C地区の層位と遺構

第8層までは近代、第9・10層は近世、第11・12層は中世の整地層と思われる。第13層・第16層上面で中世の遺構を検出した。調査区南端では遺構面に27cmの段差が認められた。第13～15層は河道性の堆積層と思われ、南西方向から、弥生時代後期以前の堆積層をほとんど削平して堆積していた。第13～15層からは古墳時代の遺物（第13図、37・38）が出土した。第16層は古墳時代前期でA地区第14層、第17層は弥生時代後期でA地区第15層、第18層は弥生時代中期でA地区第16層に相当する。

土壙1、ピットは中世、土壙4は近世、それ以外は近代の遺構である。それぞれの深さは土壙1が64cm、ピット1が29cm、ピット2が11cm、土壙4が15cmである。また第11層上面から直径6cm程度の杭を打ち込んだ痕跡が確認できた。

土壙1は遺構面の段差の部分にまたがり、低い南側が楕円形、高い北側が隅丸方形である。出土遺物（第13図、23～35）から13世紀後半から14世紀初頭に埋まったものと思われる。



- |                                |                               |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1. 盛土                          | 2. 5Y4/1灰色細粒砂～細礫混じり粘土         |
| 3. 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～細礫混じり粘土      | 4. 2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂～中礫混じり粘土     |
| 5. 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂 中礫以下混じる | 6. 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂 中礫以下混じる |
| 7. 5Y4/1灰色細粒砂～中礫混じり粘土          | 8. 5Y5/1灰色中粒砂～中礫混じり粘土         |
| 9. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂～中礫混じり粘土      | 10. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～中礫混じり粘土    |
| 11. 10YR6/1褐灰色細粒砂～中礫混じり粘土      | 12. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～中礫混じり粘土  |
| 13. 10YR5/6黄褐色極細粒砂～中礫          | 14. 7.5Y4/1灰色極細粒砂～中礫 植物遺体のラミナ |
| 15. 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂        | 16. 2.5Y5/3黄褐色細粒砂～中礫          |
| 17. 5Y2/1黒色粘土 炭化物混じる 鉄分沈着      | 18. 5Y5/1灰色粗粒砂～中礫             |

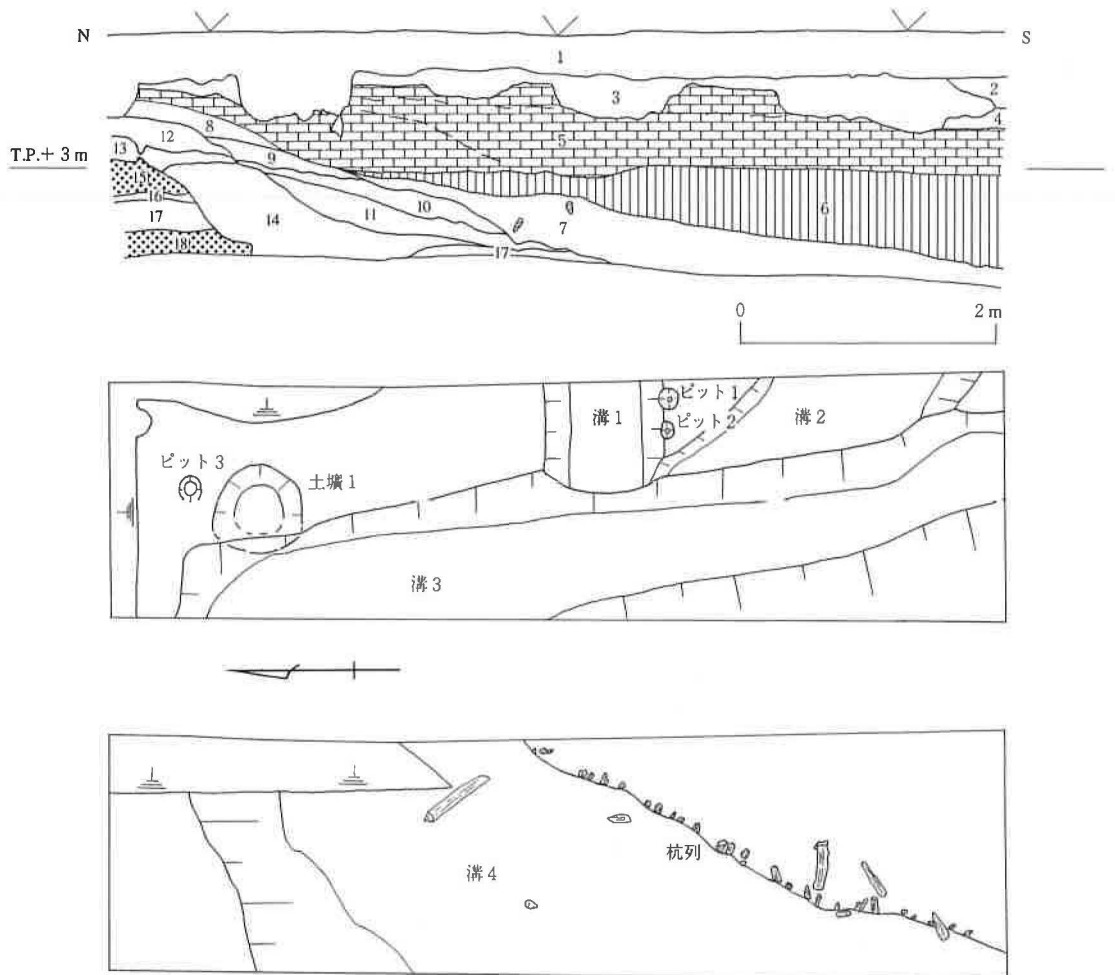
第6図 C地区断面図・遺構平面図 (1/60)



#### 4 D地区の層位と遺構

第2・3層は近世の遺物を含む。第5層は古墳時代前の堆積層でB地区第3層、第15層は古墳時代初頭の遺物（第13図、39）が出土しB地区第4層、第16層はB地区第5層、第17層は弥生時代後期でB地区第6・7層、第18層は弥生時代中期でB地区第9層にそれぞれ相当する。第4・5層上面で中世～近世の遺構、第15層上面で古墳時代初頭～前期の遺構を検出した。

溝1・2、土壙1は近世、溝3、ピット1～3は中世の遺構である。それぞれの深さは溝1が28cm、溝2が32cm、溝3が36cm、ピット1が17cm、ピット2が15cm、ピット3が4cmである。



- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1. 盛土                        | 2. 7.5Y4/1 灰色中粒砂～中礫混じり粘土     |
| 3. 7.5Y3/1 オリーブ黒色中粒砂～中礫混じり粘土 | 4. 7.5YR4/4 褐色粗粒砂～細礫混じり粘土    |
| 5. 5Y4/4暗オリーブ色粘土             | 6. 5GY2/1オリーブ黒色シルト～粘土        |
| 7. 7.5Y2/1黒色シルト～粘土           | 8. 10GY4/1暗緑灰色細礫混じり極細粒砂～中粒砂  |
| 9. 5GY5/1オリーブ灰色シルト～粘土        | 10. 10GY3/1暗緑灰色シルト～極細粒砂      |
| 11. 10G3/1暗緑灰色極細粒砂～細粒砂       | 12. 5GY5/1オリーブ灰色細礫混じり細粒砂～中粒砂 |
| 13. 7.5GY5/1緑灰色シルト～極細粒砂      | 14. 10GY5/1緑灰色シルト～極細粒砂       |
| 15. 2.5Y7/6明黄褐色極細粒砂～中粒砂      | 16. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～粘土    |
| 17. 10G3/1暗緑灰色粗粒砂～中礫混じり粘土    | 18. 2.5Y6/6明黄褐色極粗粒砂～中礫       |

第7図 D地区断面図・遺構平面図 (1/60)

溝 3 は水が流れた痕跡が認められなかったので、排水のためのものではない。南方の F 地区でも両肩を確認できず、なんらかの整地に伴う痕跡とも推測できる。深さは約 40cm。出土遺物（第 13 図、36）から 16 世紀前半から中頃に埋没したものと思われる。

溝 4 は二度掘り直しが行われていた。第 14 層は当初の堆積層、第 12・13 層は一度目の掘り直し時の排土、第 10・11 層は堆積層、第 8・9 層は二度目の掘り直し時の排土、第 6・7 層は堆積層である。掘り直し後の溝内は滞水状態にあったようで、第 6・10 層には極細粒砂のラミナ、第 7 層には 3 枚の植物遺体のラミナが認められた。杭列は北北東から南南西に延び、二度目の掘り直し時に打ち込まれたものと思われる。杭は直径 5 cm 程度のものが多く、杭の間隔は 10～35cm で、護岸のためにのり面に対して垂直に近い角度で打ち込まれていた。遺構内から遺物は出土しなかったが、ベースとなる第 15 層から古墳時代初頭の遺物が出土し、埋没後に古墳時代前期の地層である第 5 層が堆積していることから、使用時期はこの間と推測される。

第 15 層が液状化した幅約 1 cm、長さ約 10cm の噴砂を確認した。溝 4 の排土である脆弱な第 13 層を裂いて、第 12 層の途中で断面から消滅していた。古墳時代以降の地震に伴う痕跡である。

## 5 E 地区の層位と遺構

第 2 層は近世の遺物を含む整地層で、下面で中世～近世の遺構を検出した。第 4・5 層は中世の遺物を含む溝 1 内の埋土層である。第 6・7 層は第 12 層のブロックおよび炭化物を含み、中世の整地層と考えられ、下面で中世の遺構を検出した。第 8 層は古墳時代前期の堆積層で A 地区第 14 層に相当する。第 9 層～第 18 層は南西方向から堆積した地層で、C 地区の第 13 層～第 15 層に対応する。第 12 層にはシルト～粘土のラミナが 5 枚認められた。また第 16 層～第 18 層に達する杭を 1 本確認できた。

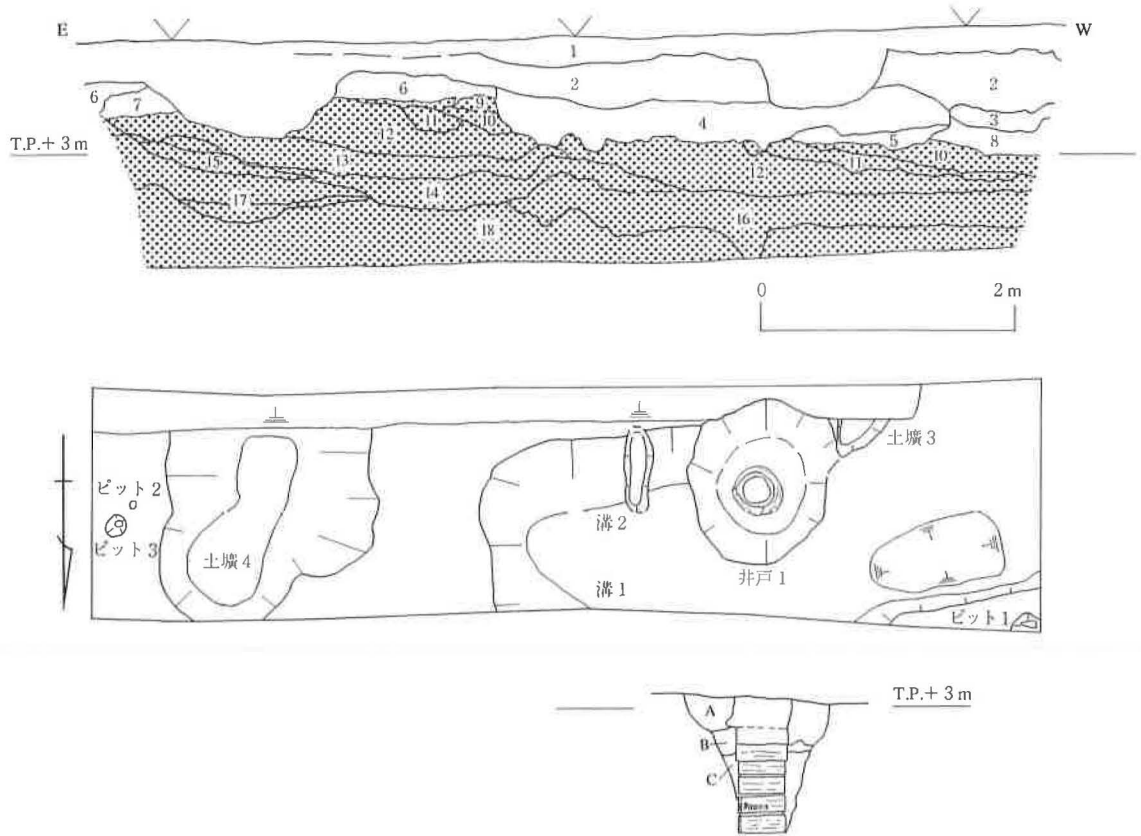
井戸 1、溝 1、ピット 1～3、土壙 4 は中世、溝 2、土壙 3 は近世の遺構である。各遺構の深さは溝 1 が 34cm、ピット 1 が 11cm、ピット 2 が 26cm、ピット 3 が 26cm、土壙 4 が 37cm、土壙 3 が 13cm、溝 2 が 9 cm である。土壙 1・2 は近代のため図化は割愛した。

井戸 1 は長径 130cm、短径 110cm の平面楕円形、深さ 110cm の堀方に、直径約 36cm、高さ約 30cm の曲物（第 17 図、98・99）が井戸側として使用されていた。堀方の深さに対する曲物の高さの比率から、本来は曲物が 4 段積み上げられていたと思われるが、1 段目は消失しており、2 段目の上半は腐食し、3・4 段目が完存していた。井戸内の出土遺物（第 14 図、40～49）から 13 世紀末～14 世紀初頭に埋められたものと思われる。

溝 1 は水が流れた痕跡は認められなかった。土師器皿、瓦器碗等の出土遺物から 16 世紀頃に埋まったものと思われる。

土壙 4 は出土遺物（第 14 図、50・51・53）から 12 世紀後半頃に埋められたものと思われる。





- |                                  |                              |
|----------------------------------|------------------------------|
| 1. 盛土                            | 2. 7.5YR4/2灰褐色中粒砂～中礫混じり粘土    |
| 3. 10YR3/3暗褐色細粒砂～細礫混じり粘土         | 4. 10Y5/2オリーブ灰色細粒砂～中礫混じり粘土   |
| 5. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～中礫混じり粘土      | 6. 2.5Y2/1黒色粗粒砂～中礫混じり粘土      |
| 7. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～中礫混じり粘土        | 8. 2.5Y5/3黄褐色粘土              |
| 9. 10Y5/2オリーブ灰色細粒砂～中礫混じり粘土       | 10. 5Y5/1灰色シルト～極細粒砂          |
| 11. 2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂～中礫            | 12. 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂      |
| 13. 2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂～極粗粒砂、極細粒砂～細粒砂 | 14. 5Y4/1灰色粗粒砂～中礫            |
| 15. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細粒砂、細粒砂～中礫   | 16. 2.5Y6/2灰黄色中粒砂～細礫、細粒砂～粗粒砂 |
| 17. 7.5Y4/2灰オリーブ色細粒砂～中粒砂         | 18. 5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～中礫      |
| A. 2.5Y4/1黄灰色中粒砂～中礫混じりシルト～粘土     | B. 5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～細礫混じりシルト   |
| C. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂        |                              |

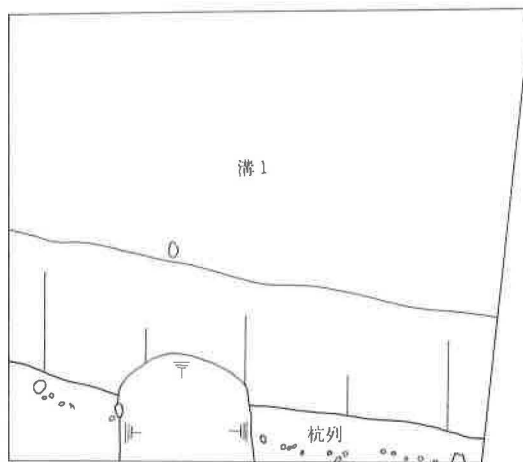
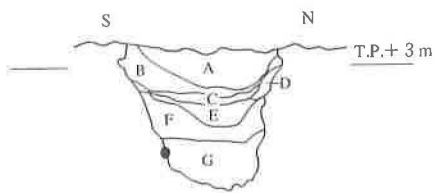
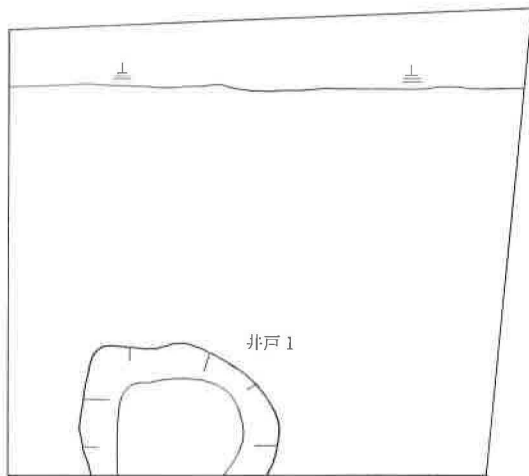
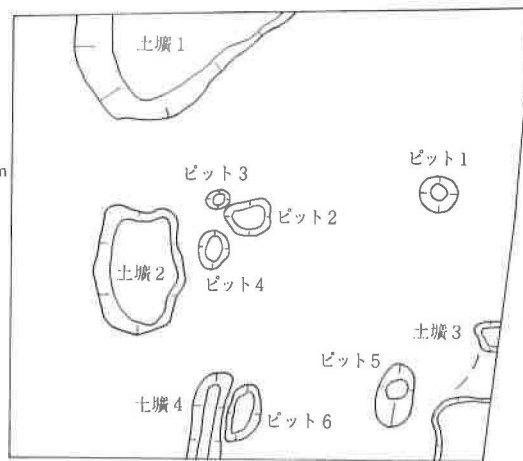
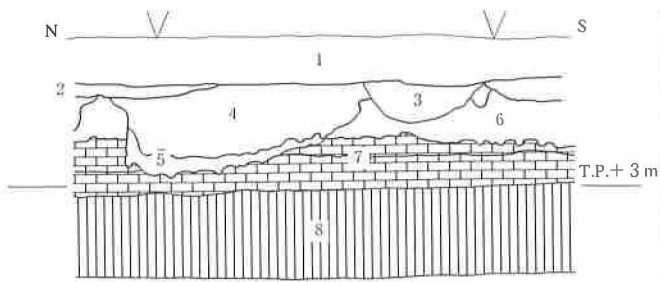
第8図 E地区断面図・遺構平面図 (1/60)

### 6 F地区の層位と遺構

第2～5層は炭化物および近世の遺物を含み、第4・5層は土壌1の埋土層である。第6層はD地区で溝3と仮称した一段掘下げられたところを、第7層を客土にして埋めた整地層で、中世の遺物を包含し上面で近世の遺構、下面で中世の遺構を検出した。第7層は古墳時代前期の堆積層でD地区第5層に、第8層は溝内堆積層でD地区第6層にそれぞれ相当する。第7層の上半にはシルト～極細粒砂のラミナ、下半には極細粒砂～細粒砂のラミナ、第8層には極細粒砂～細粒砂のラミナが認められた。

土壌1～3、ピット1～6、溝は近世の遺構である。各遺構の規模は土壌1が深さ72cm、土壌2が14cm、土壌3が37cm、ピットが長径17～50cm、深さ13～21cm、溝が深さ11cmを測る。

井戸1は直径146cm、深さ114cmで、断面には直径6cmの杭が検出された



- |                                |                               |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1. 盛土                          | 2. 7.5Y4/2 灰オリーブ色粗粒砂～中礫混じり粘土  |
| 3. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粗粒砂～中礫混じり粘土 | 4. 7.5YR5/1 褐灰色中粒砂～中礫混じり粘土    |
| 5. 2.5YR5/1 赤灰色粗粒砂～中礫混じり粘土     | 6. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗粒砂～中礫混じり粘土    |
| 7. 10YR5/2 灰黄褐色粘土              | 8. 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト～粘土       |
| A. 灰層                          | B. 5YR4/6 赤褐色中粒砂～細礫混じり粘土      |
| C. 2.5Y3/1 黒褐色細粒砂～中礫混じり粘土      | D. 5YR4/6 赤褐色細粒砂～細礫混じり粘土      |
| E. 7.5Y4/1 灰色中粒砂～粗粒砂混じり粘土      | F. 2.5GY2/1 黒色中粒砂～細礫混じりシルト～粘土 |
| G. 7.5GY4/1 暗緑灰色粘土～細粒砂         |                               |

第9図 F地区断面図・遺構平面図 (1/60)

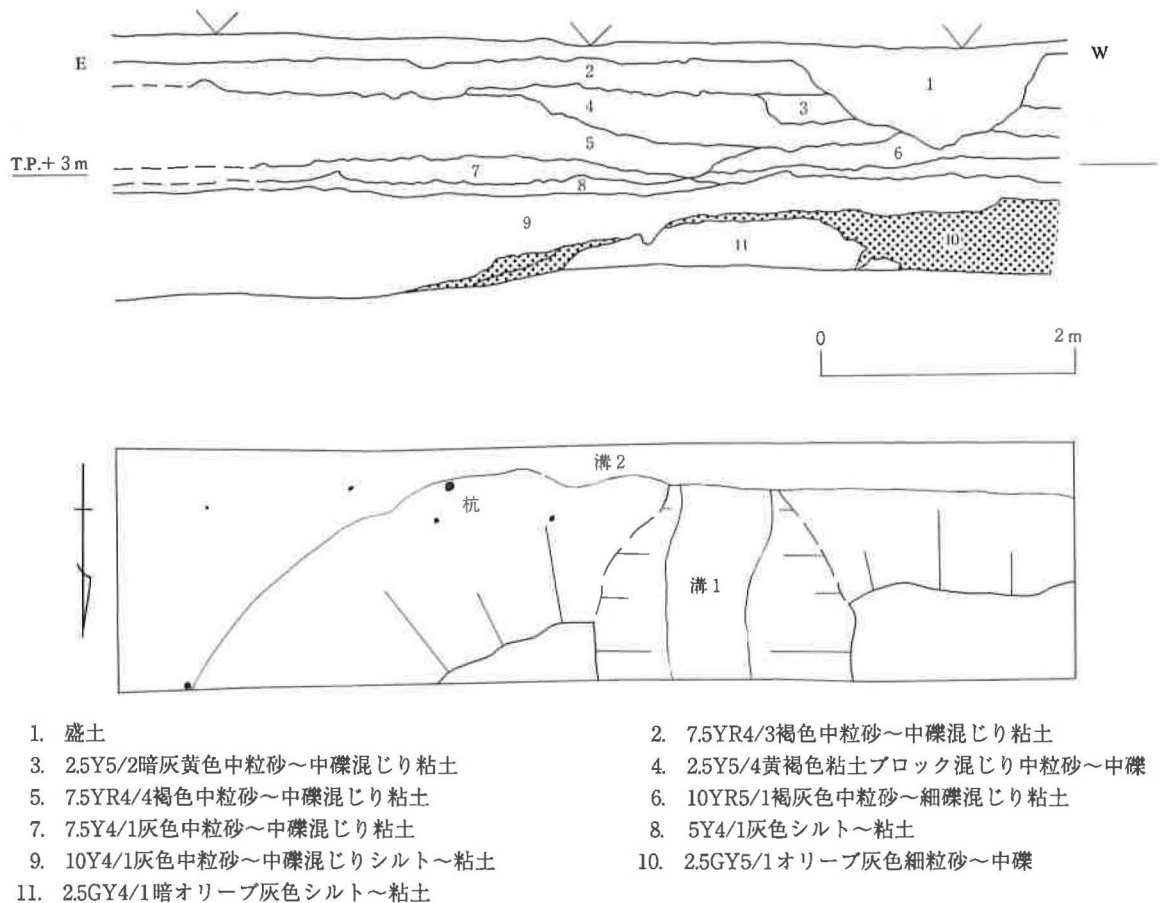
が、井戸側が存在した痕跡は確認されず、当初より素掘りであったと考えられる。井戸内の層位はA～E層が埋土層、F・G層が堆積層である。A層は灰層、B～E層には炭化物が混じっていることから、火を使用した井戸廃棄に伴う儀礼が執り行われたものと考えられる。井戸内埋土層からは多くの完形品の土器に混じって、穿孔された土師器皿（第15図、71）も出土しており、遺物からみても何らかの儀礼が執り行われたことが推測できる。井戸1は出土遺物（第15図、55～80）から12世紀中頃に廃棄されたと思われる。

D地区から続く杭列を伴う溝1は幅360cmを越えており、東肩は調査地外のため確認できなかった。

### 7 G地区の層位と遺構

第2層は近世の遺物を含んだ整地層、第3～7層は16世紀後半の遺物を含んだ溝2埋土層、第8・9層は15世紀後半の遺物を含んだ溝2堆積層である。溝2内の各層は炭化物を含み、第8層には細粒砂～中礫のブロック、第9層には極細粒砂～細粒砂のブロックが混入する。第10層はシルトのラミナを含んだ古墳時代前期の堆積層でE地区第18層に相当し、第11層は弥生時代後期のC地区第18層に相当するものと思われる。

溝1は南北方向に延び、幅200cm、深さ66cmで底部は南側が9cm低く、北



第10図 G地区断面図・遺構平面図（1/60）

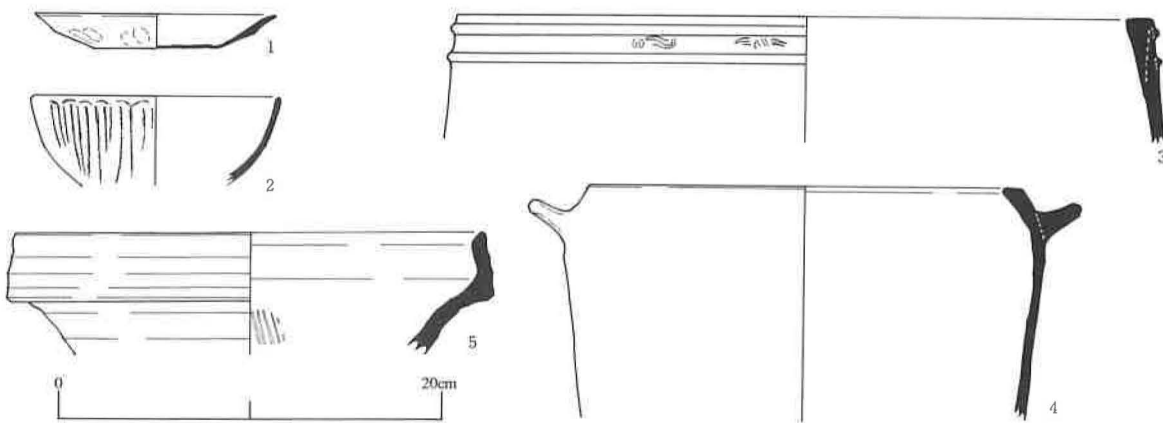
から南に水が流れていたと思われるため、溝2へ排水する機能を果たしていたと考えられる。またこの溝はA地区に続く可能性がある。出土遺物（第16図、81）から15世紀後半に使用されたと思われる。

溝2は東半では北東方向に、西半では西方向に延びるため、二条の溝が直行していた可能性がある。底部では直径2～8cmの杭を6本検出した。溝の深さは160cmあり、比較的大規模なものであることから、若江城の堀の一部と考えられる。埋土層からは16世紀後半の遺物（第16図、83～90）が出土していることから、天正8年（1580）の織田信長による城割りの際に埋められたものと推測できる。

## V. 出土遺物

### 1 A地区出土土器

1は溝2出土の土師器皿、2は龍泉窯系と思われる青磁碗、3は瓦質火舎、4は把手付釜、5は包含層出土の備前焼播鉢である。1は平底の底部から口縁部が外反しながら大きく開き、底部と体部の境に溝状の凹みがあることから16世紀後半頃のものと思われる。4は溝2中央の一段落ち込んだ部分から出土した。長さ11cm以上の把手が外上方に向かって付けられている。器形は体部から把手にかけてほぼ直線でわずかに開き、把手から口縁部にかけては内傾する。体部内面にはこげつきが見られる。溝2からは図化した遺物のほかに瓦器碗、瓦質播鉢、瓦質甕等の細片が出土している。



第11図 A地区出土土器

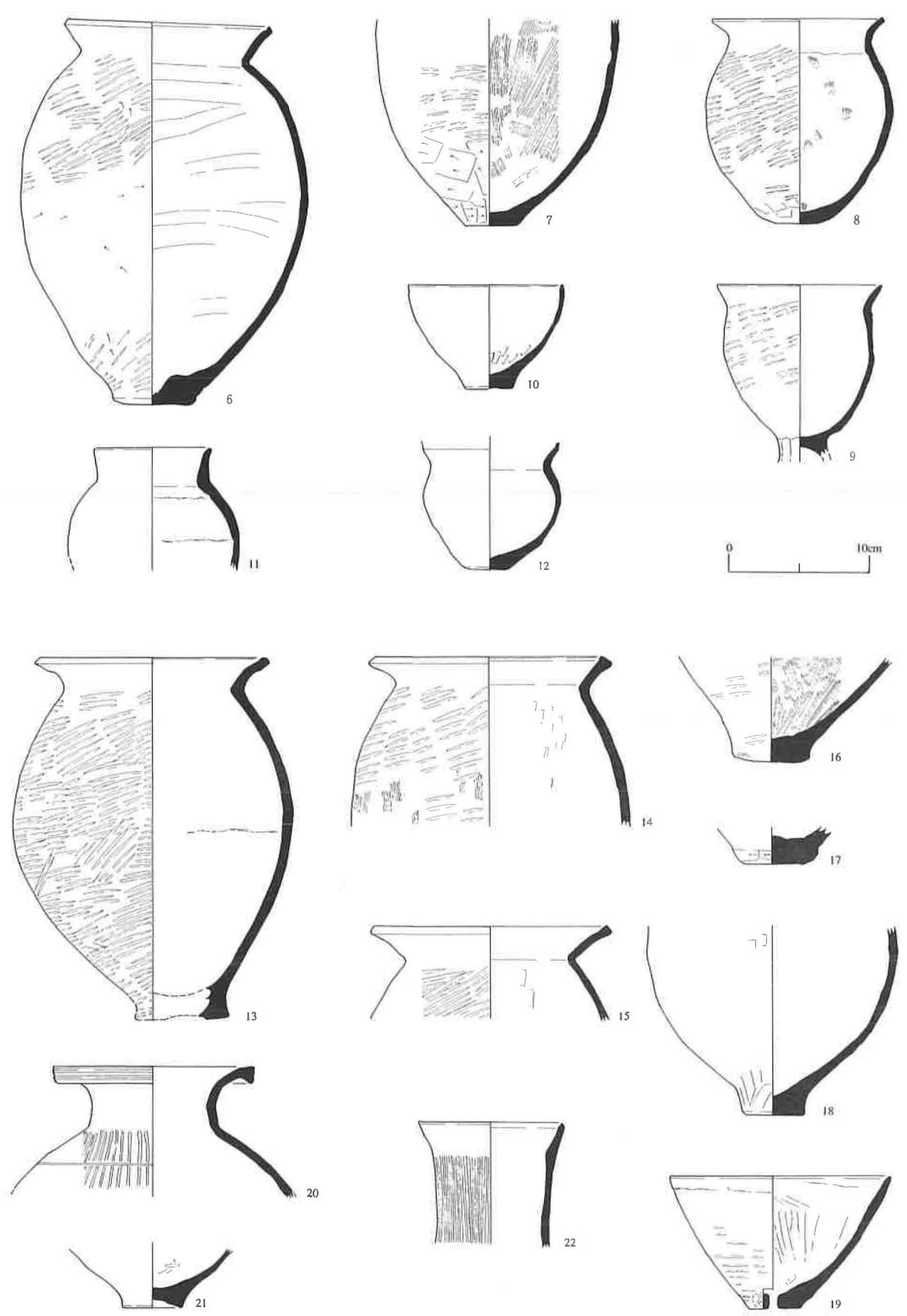
### 2 B地区出土土器

6～8は第3層出土の甕、9は台付甕、10は鉢、11は短頸壺、12は小型甕である。器体の色調は6が灰白色系、それ以外は褐色系である。

9は脚部外面のナデ調整が強く、稜が認められる。

13～18は第6・7層出土の甕、19は鉢、20・21は壺、22は長頸壺である。器体の色調は全て褐色系である。

19は底部に直径7mmの孔がひとつ焼成前にあけられている。



第 12 图 B 地区出土土器

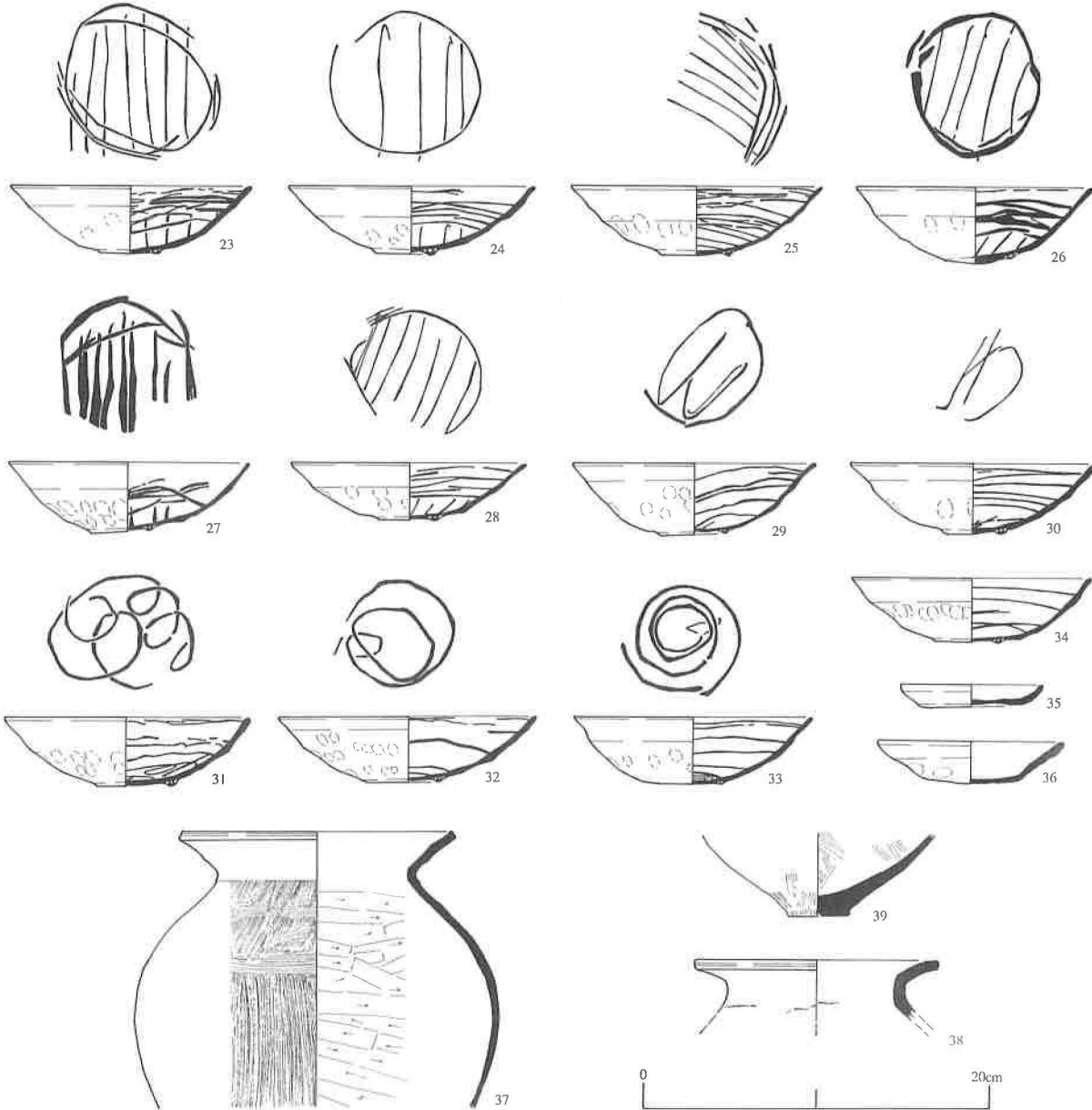
### 3 C・D地区出土土器

23～34はC地区土壙1出土の瓦器椀、35は土師器皿である。

瓦器椀には見込み部の暗文が平行線状(23～30)、連結輪状(31)、渦巻状(32・33)のタイプがある。体部外面にはヘラミガキは施されておらず、高台は形骸化して途切れているもの(26・27・30)や、底部が突出しているもの(26)も見られる。これらの特徴から出土した瓦器椀は、13世紀末～14世紀初頭頃に比定できる。土壙1からは図化した遺物のほかに土師器羽釜、東播系こね鉢、瓦等の細片が出土している。

36はD地区溝3出土の土師器皿で、平底の底部から口縁部が外反しながら大きく開く器形から、16世紀前半～中頃のものと思われる。溝3からは土師器羽釜、瓦器椀、瓦質羽釜等の細片も出土している。

37・38はC地区第13～15層出土の土師器甕、39はD地区第15層出土の土



第13図 C・D地区出土土器

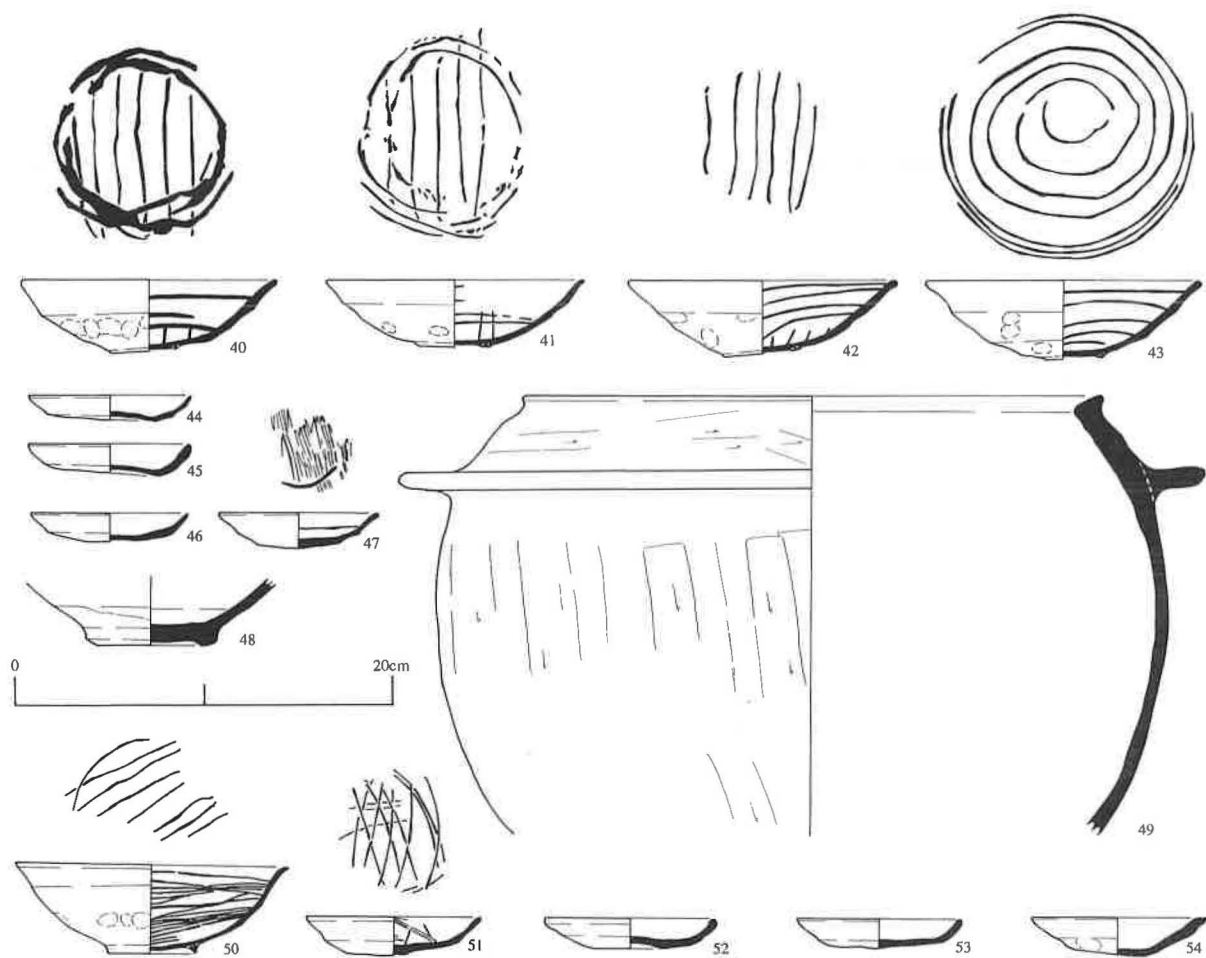
師器甕で、いずれも古墳時代前期のものである。

#### 4 E地区出土土器

40～43は井戸1出土の瓦器椀、44・45は土師器皿、46・47は瓦器皿、48は白磁碗、49は土師器羽釜である。瓦器椀には見込み部の暗文が平行線状（40～42）、渦巻状（43）のタイプがある。体部外面にはヘラミガキは施されておらず、高台は形骸化して途切れているもの（41・42）も見られる。これらの特徴から出土した瓦器椀は、13世紀末～14世紀初頭頃に比定できる。井戸1内からは図化した遺物のほかに土師器羽釜、瓦質挿鉢、東播系こね鉢等の細片、堀方からは土師器皿、土師器羽釜、瓦器椀、瓦器皿等の細片が出土している。

50は土壙4出土の瓦器椀、51は瓦器皿、53は土師器皿である。瓦器椀は見込み部に平行線状の暗文が施され、器形は深く、内面のヘラミガキは粗略気味、外面にはヘラミガキが認められないことから、12世紀後半頃に比定できる。土壙4からは図化した遺物のほかに土師器羽釜、瓦質羽釜、白磁碗等の細片が出土している。

52は土壙5出土の土師器皿で、口縁端部外面は面をもち、内面は肥厚して丸みをもつことから12世紀前半頃のものと思われる。土壙5からはこのほか



第14図 E地区出土土器

に瓦器椀の細片が出土している。

54は包含層出土の土師器皿で、口縁端部はヘラ状工具で水平に面取りされている。口縁端部には全周にわたって幅6mm程で煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられるため、灯芯を安定させるために面取りを施したものと推測できる。色調は灰白色である。底部から口縁部が外反しながら大きく開く器形から、16世紀前半～中頃のものと思われる。

## 5 F地区出土土器

55～65は井戸1出土の瓦器椀、66～70は瓦器皿、71～80は土師器皿である。58・60は井戸内の堆積層から出土し、それら以外は埋土層から出土した。

瓦器椀には見込み部の暗文が格子状(55～59)、平行線状(60～64)、連結輪状(65)のタイプがある。体部外面のヘラミガキは分割性が形骸化の傾向にある。堆積層出土の58・60の高台は外方向へ開き気味であるため12世紀前葉頃、それら以外の埋土層出土の瓦器椀は高台が断面逆三角形で直立気味のため12世紀中頃に比定できる。57は口縁端部が直角に近い形で外側に短く折れている。他の瓦器椀と比較して器肉はやや薄く、暗文、ヘラミガキは細い。

瓦器皿には見込み部の暗文がジグザグ状(66)、平行線状(67～70)のタイプがある。器形では平底から屈曲して口縁部が外上方に立つもの(66～68)、丸底のもの(70)、両者の中間形態(69)に分類できる。

土師器皿には口径14cm前後の大皿(72～74)と口径9.5cm前後の小皿(71・75～80)がある。細片も含めた出土量の割合は小皿のほうが多い。器体の色調は72・75・76・77・79が白色系、71・73・74・78・80が褐色系である。71は底部中央に、焼成後に内外面から長辺1.4cm、短辺1.2cmの隅丸方形に穿孔が施されている。出土層位が井戸1内埋土層にあたることから、井戸の廃絶に伴う儀礼に使用され、穿孔を受けたものと考えられる。器体の色調はにぶい橙色である。共伴の瓦器椀と同じ12世紀中頃のものと思われる。井戸1からは図化した遺物のほかに土師器羽釜、白磁碗、瓦等の細片が出土している。

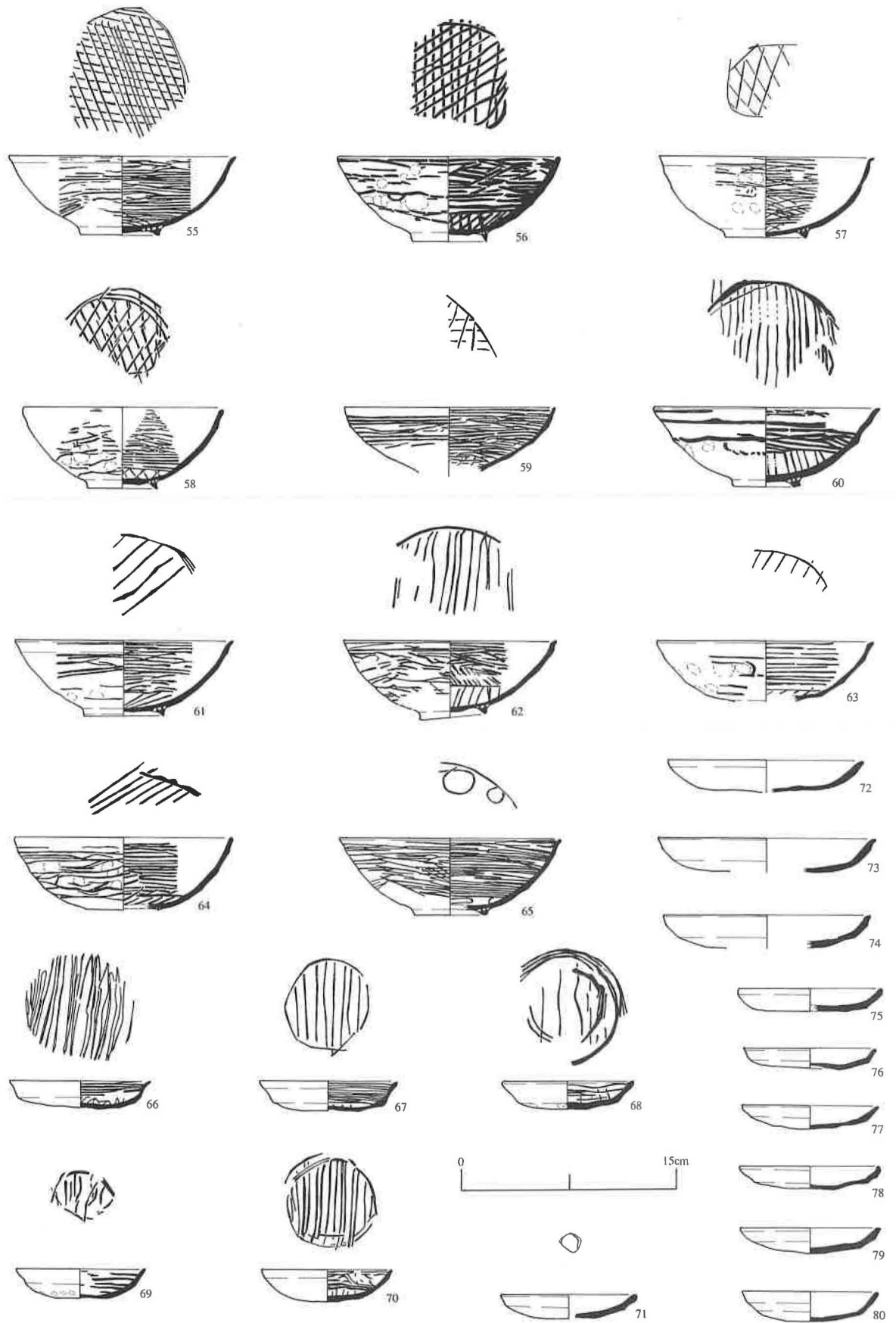
## 6 G地区出土土器

81は溝1出土の土師器皿で、平底の底部から口縁部が外反しながら開く器形から、15世紀後半のものと思われる。溝1からはこのほかに土師器羽釜、瓦器椀、瓦質火舎、陶器播鉢等の細片が出土している。

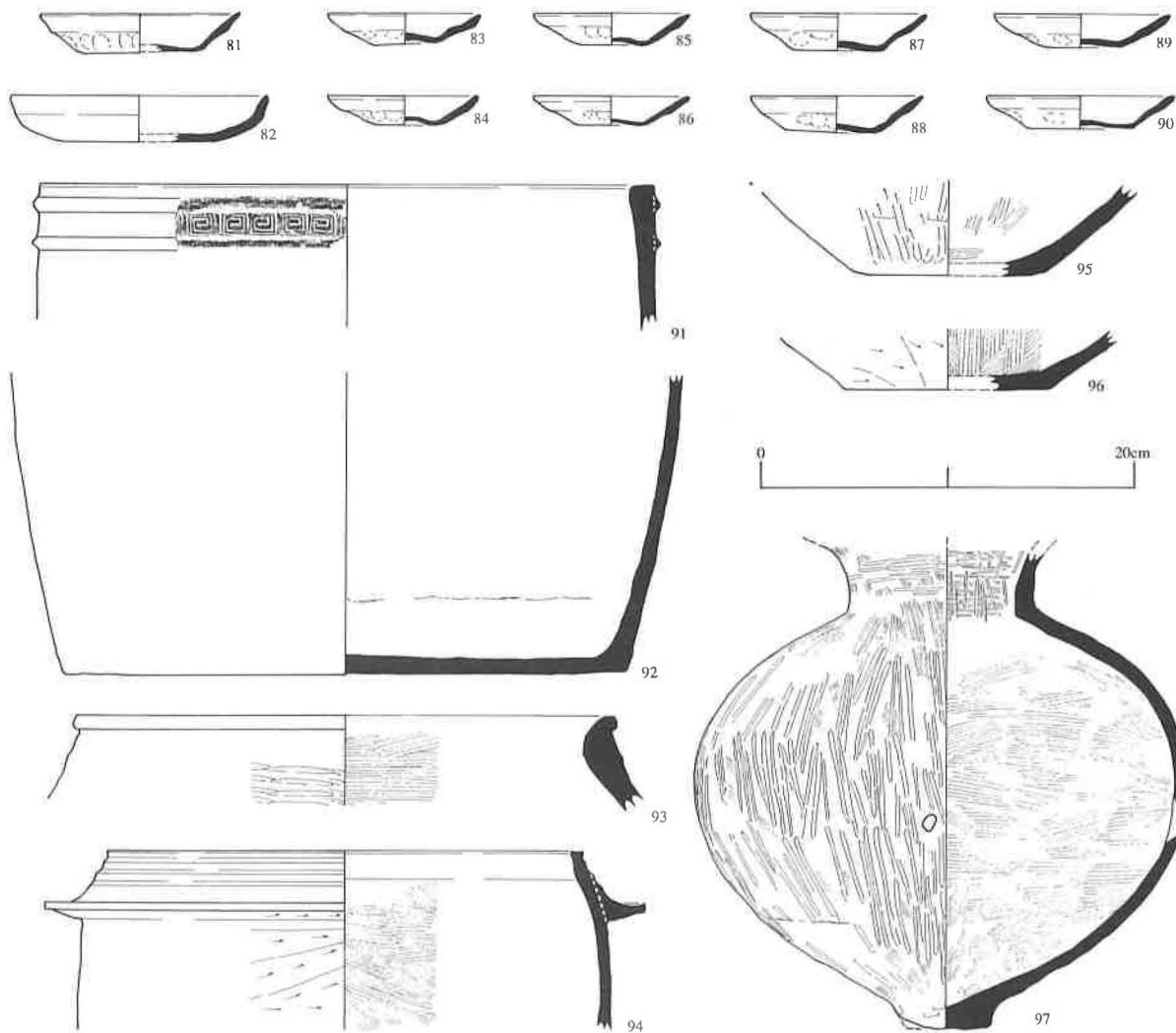
82～90は溝2出土の土師器皿、91・92は瓦質火舎、93は瓦質甕、94は瓦質羽釜、95・96は瓦質播鉢である。82・91・95・96は堆積層から出土し、それら以外は埋土層から出土した。

溝2埋土層からは80枚程の土師器皿が一括出土した。口径8cm前後の小皿(83～86)が全体の数量の約7割、口径9.5cm前後の中皿(87～90)が約3割を占める。器体の色調はいずれも褐色系である。灯明皿等に用いられた痕跡はない。一括出土した土師器皿は小皿・中皿いずれもが上げ底気味で、底部から口縁部が外反しながら大きく開き、底部と体部の境に溝状の凹みがあること





第 15 图 F 地区出土土器



第16図 G地区出土土器

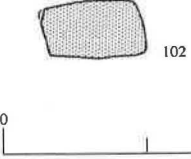
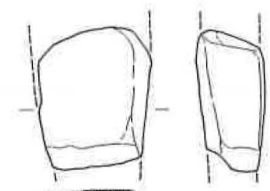
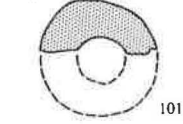
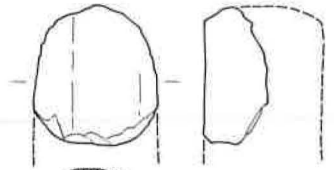
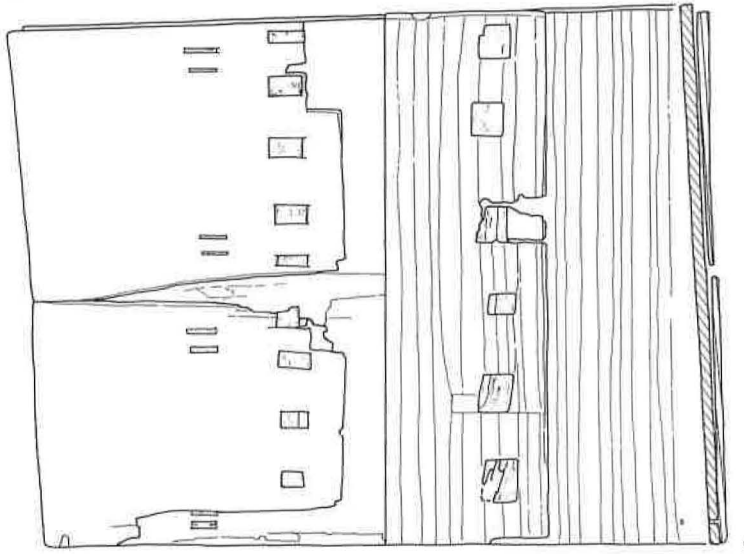
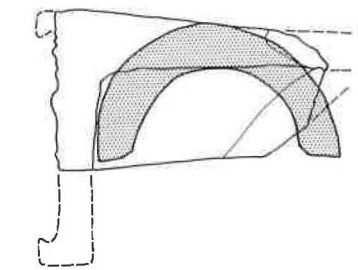
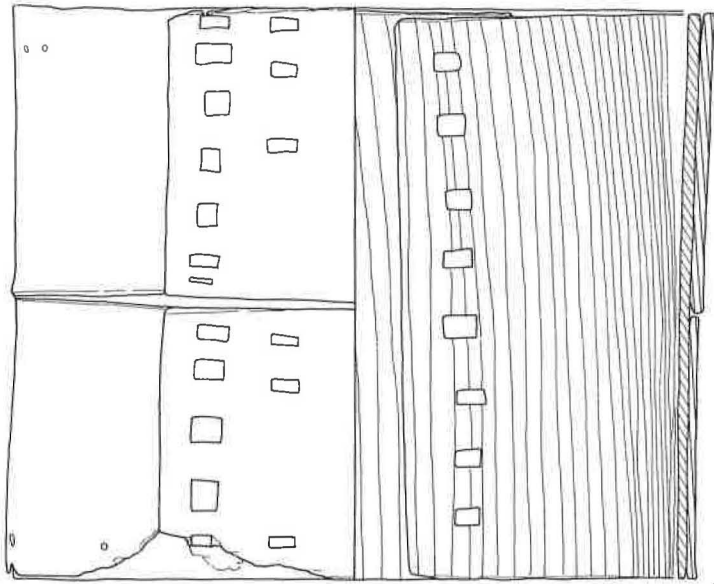
から、16世紀後半のものと思われる。95は1cm幅に5条の櫛状工具で間隔をあけて揺り目を施し、96は1.2cm幅に6条の櫛状工具で内面全体にて揺り目を施す。溝2からは図化した遺物のほかに土師器羽釜、瓦器碗、白磁碗等の細片、堆積層からは板材等の木器が出土している。

97は第10層出土の古墳時代前期の土師器壺である。外面はハケメの後、体部は縦方向のミガキ、頸部は横方向のミガキを施す。内面はハケメの後、頸部に縦方向のミガキを施す。体部の中央やや下寄りに穿孔がひとつ認められる。

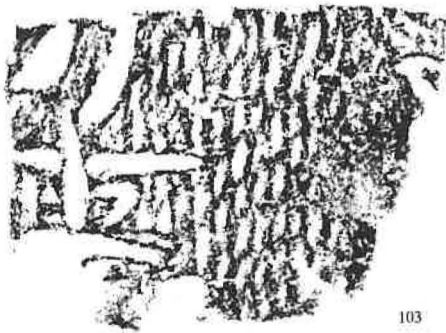
#### 7 その他の遺物

98・99はE地区井戸1の井戸側の3段目と4段目に使用されていた曲物である。いずれも内面には縦方向のケビキが施されている。幅広の帯が2枚まわされ側板全体を覆っている。

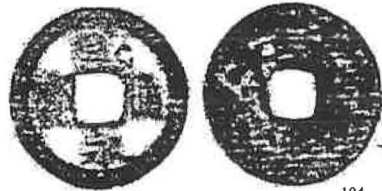
100はG地区溝2埋土出土の巴文の軒丸瓦、101はA地区包含層出土の鞆で先端の内面には被熱の痕跡がみられる。102はG地区溝1出土の砥石で灰白色の色調をしており、4側面が砥面として使用されている。



0 15cm



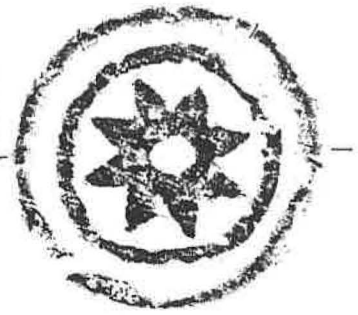
0 5cm



104



105



106

第17図 その他の出土遺物

103はD地区出土の文字瓦である。破片であるため判読できないが、左端に2文字、右端に1文字ヘラ書きされているものと思われる。

104はF地区包含層出土の寛永通寶で、背面には文字が見られない。

105はE地区の上層60cmまでを機械掘削中に出土した永樂通寶の土製品である。直径は2.1cmで実物の銭貨の平均的な大きさよりも3mm程度小さい。表面は型押し成形で銭文・郭・外輪を模倣しているが、郭は背面まで貫通していない。背面には郭・外輪はなく、平坦に仕上げられている。

106はA地区土壌3から出土した土製の独楽である。上面に星形風の模様が施されている。製造時に型から取りやすくしたため、全体に離れ砂が付着している。

## VI. まとめ

今回の調査では、弥生時代～江戸時代に至る遺物・遺構を検出した。このうち中世の遺物・遺構が規模と数量で卓越している。そのため中世を主として、調査で得られた知見と今後の課題を記して、まとめとしたい。

1. G地区検出の溝2は、当調査地から西方20mの第21次調査No.14ピット<sup>(22)</sup>、東方10mの第26次調査No.1ピット<sup>(23)</sup>で検出された溝と同一遺構であろう。その規模と出土遺物から、天正8年(1580)に織田信長によって破却された若江城の堀の一部と考えられる。この堀は江戸時代以降十三街道と呼ばれる道路下に存在するため、中世段階で街道がどの位置を通っていたのかという課題が派生する。

2. 若江遺跡の平安時代後期～鎌倉時代の遺構内に、灰が充填されている例が散見されることは既に指摘されているが<sup>(24)</sup>、今回の調査で検出したF地区井戸1も灰が認められた。しかも底部を穿孔された土師器皿も出土しており、なんらかの祭祀や儀礼が執り行われた痕跡と推測できる。

例えば江戸時代の「枯井に水を涌す法術」では、「若枯れたる泉に水を出さしめんと欲ハ、浄灰にて是を圍て井華水三升を取て泉の中に置て、寅時に於て咒する事一百八遍すれば、水車輪の如く涌出す」とあり<sup>(25)</sup>、灰を用いた井戸での祭祀・儀礼が文献上確かめられる。

しかし今回検出した井戸では、灰は底部の堆積層ではなく埋土層で確認され、そこから穿孔された土師器皿も出土しているため、水を涌かすことが目的ではなく、井戸の廃棄に伴うものであろう。典籍の特定、作法の復元などについては今後の課題である。

3. 貨幣模造品は、六道銭の代用品として使用された事例が、近年数多く報告されている<sup>(26)</sup>。しかし若江遺跡では、これまで中近世の墓は検出されておらず、今回E地区で出土した土製品は、埋納用品ではなく、穴一に用いる遊戯具としての泥面であろう。銭貨の図柄が泥面に採用されたのは、賭博的要素の強い遊戯に使用するためであろうが、この土製品には永樂通寶が意匠されている点も興味深い。なぜならくめんこ>の図柄は、各時代の子どもの好みを体

現しているだけでなく、文化環境、政治・社会状況などが反映されているからである<sup>(27)</sup>。

15世紀後半以降、撰銭の対象となった明銭の中で永楽通寶が16世紀初頭には精銭に準じ、中葉には東国において基準通貨となっていたことが文献史料から知られ、出土備蓄銭・六道銭の分析を通して、16世紀における永楽通寶の東国集中、「超精銭化」現象が明らかになっている<sup>(28)</sup>。

この土製品は、機械掘削中の出土で層位的に製作年代を詳らかにしえないが、16世紀代の永楽通寶の動向を傍証するのではないか。また若江遺跡ではこれまでに16世紀代の包含層・遺構から永楽通寶の出土事例はなく<sup>(29)</sup>、意図的に排除され続けた可能性もあり得たが、この土製品に対して先の評価を与えることができるなら、今後の調査で永楽通寶が16世紀代の遺構から出土するものと思われる。

注)

- (1) 西口陽一、宮野淳一、上西美佐子『山賀（その3）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1984  
中西靖人、小林義孝、石上幸子他『山賀（その4）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1983
- (2) 瀬川健、赤木克視、上西美佐子他『瓜生堂』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1984
- (3) 上野利明『若江遺跡第29次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会 1989  
勝田邦夫『若江遺跡第32・33次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会 1990  
勝田邦夫『若江遺跡第35次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会 1988
- (4) 金村浩一、曾我恭子、井上伸一「若江遺跡第56次調査概要」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1994年度—』（財）東大阪市文化財協会 1996
- (5) 福永信雄「西岩田遺跡第10次発掘調査概報」『東大阪市文化財協会概報集—1996年度（1）—』（財）東大阪市文化財協会 1997
- (6) 玉井功、井藤暁子、小野久隆他『巨摩・若江北』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1975
- (7) 原田修、吉村博恵、阿部嗣治「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報」『（財）東大阪市文化財協会年報 1983年度』（財）東大阪市文化財協会 1984
- (8) 前掲注（3）勝田1990
- (9) 『寧楽遺文』
- (10) 『続群書類従』八輯下

- (11) 『続群書類従』二〇輯上
- (12) 芋本隆裕「瓜生堂上層遺跡」『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡』東大阪市遺跡保護調査会 1979
- (13) 『日本輿地通志畿内部』
- (14) 今谷明「津川本畠山系図について」『守護領国支配機構の研究』法政大学出版局 1986
- (15) 以下若江城については、森田恭二『河内守護畠山氏の研究』近代文藝社 1993 が詳しい
- (16) 「1581年4月14日付、パードレ・ルイス・フロイスが都より日本在留の一パードレに送りし書翰」『イエズス会日本年報 上』
- (17) 『群書類従』二〇輯上
- (18) 前掲注(3)  
吉村博恵『若江遺跡第25次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1987  
才原金弘『若江遺跡第27次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1988
- (19) 高尾一彦「江戸時代初期の農村構成とその特質」『研究』第16号 神戸大学文学会 1958
- (20) 金村浩一、曾我恭子、井上伸一「若江遺跡第61・62次発掘調査概要」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1995年度—』(財)東大阪市文化財協会 1997
- (21) 曾我恭子「若江遺跡第58次調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1994年度—』(財)東大阪市文化財協会 1996
- (22) 勝田邦夫、阿部嗣治他「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集 1980年度』東大阪市遺跡保護調査 1981
- (23) 前掲注(7)
- (24) 三輪若葉『若江遺跡第70次・第75次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1999
- (25) 「烏樞沙摩金剛 修仙靈要籙」『神道大系 論説編十六 陰陽道』神道大系編纂会 1987
- (26) 小方泰宏他『宗玄寺跡』(財)北九州市教育文化事業団 1995  
増山仁「金沢城下における近世墓—久昌寺墓地を中心として—」『第9回関西近世考古学研究会大会 西日本近世墓の諸様相』関西近世考古学研究会 1997 など
- (27) 加藤理『日本児童文化史叢書11 <めんこ>の文化史』久山社 1996
- (28) 鈴木公雄「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』61-3・4 三田史学会 1992  
鈴木公雄「出土銭貨からみた中世後期の銭貨流通」網野善彦、石井進、萩原三雄編『帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集「中

世」から「近世」へ』名著出版 1996

- (29) 井上伸一「戦国期城郭出土銭貨の一例—若江遺跡における流通画期と精銭について—」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.6 No.4 (財)  
東大阪市文化財協会 1996

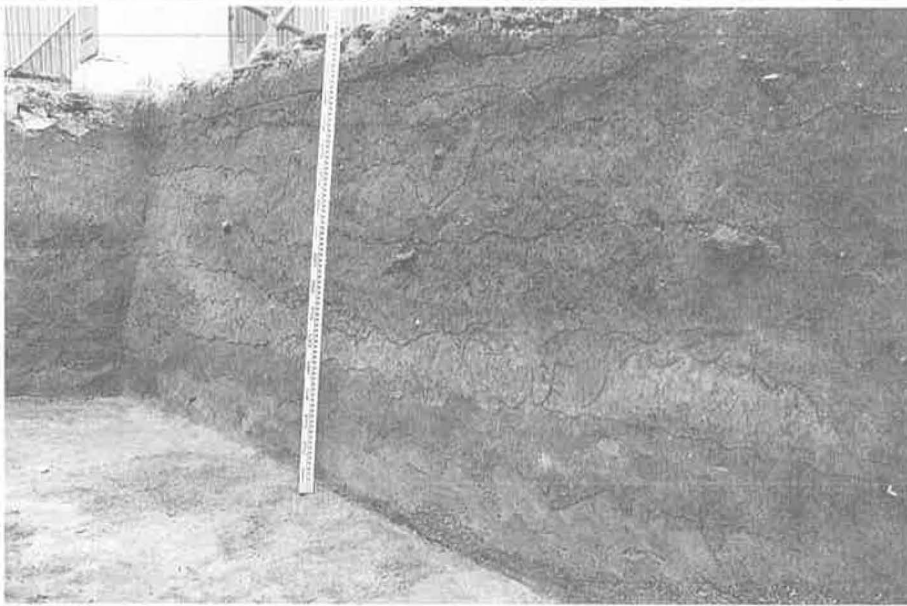
# 圖 版



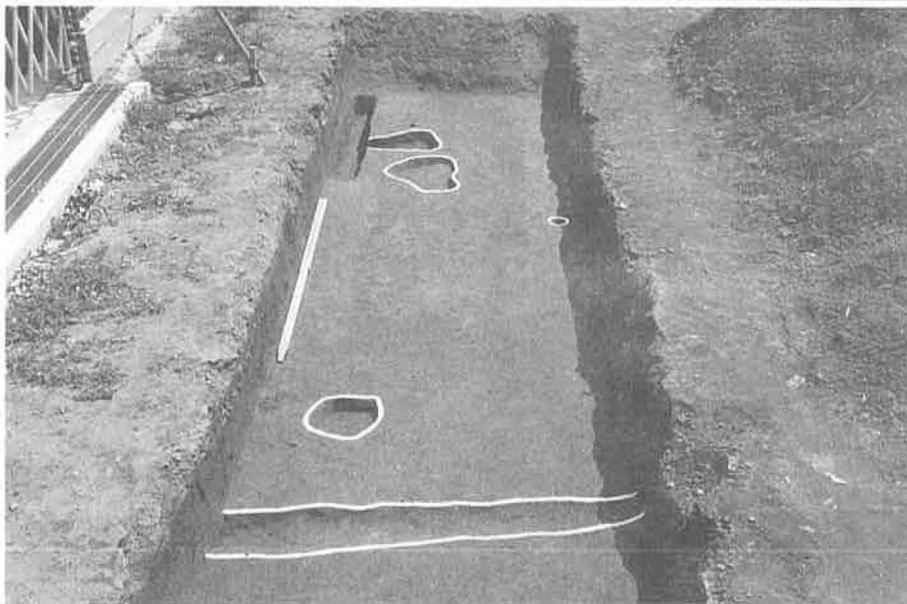
図版1 遺構



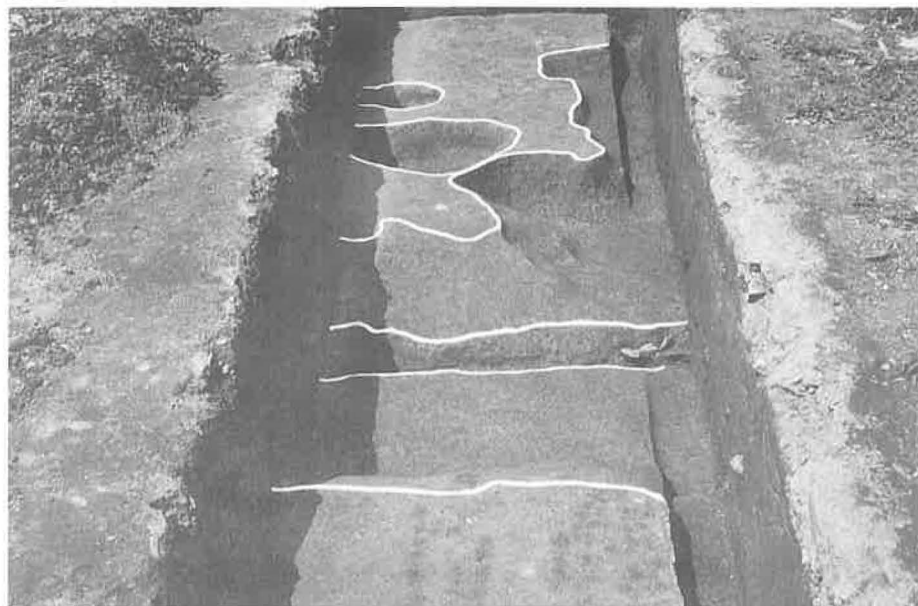
A地区  
調査風景



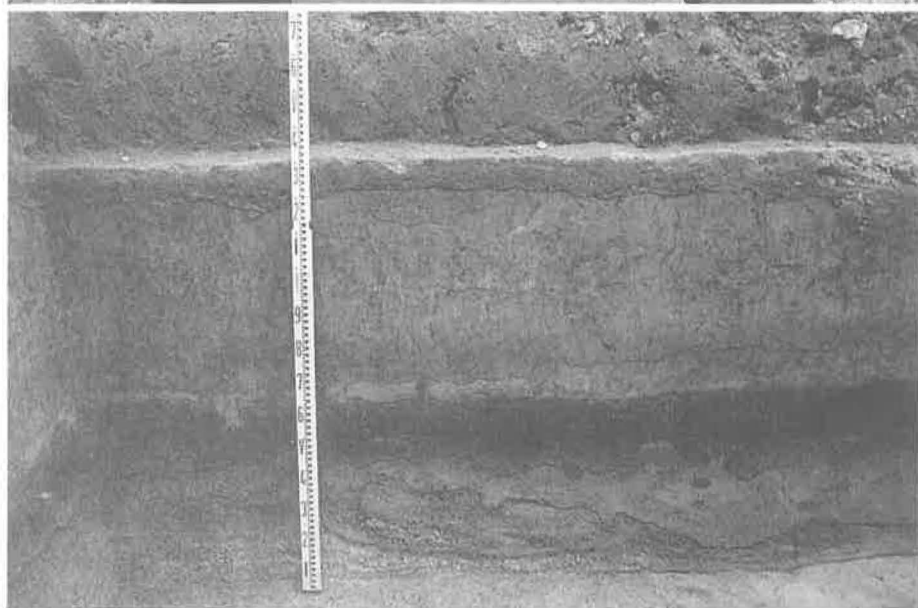
A地区  
北壁断面



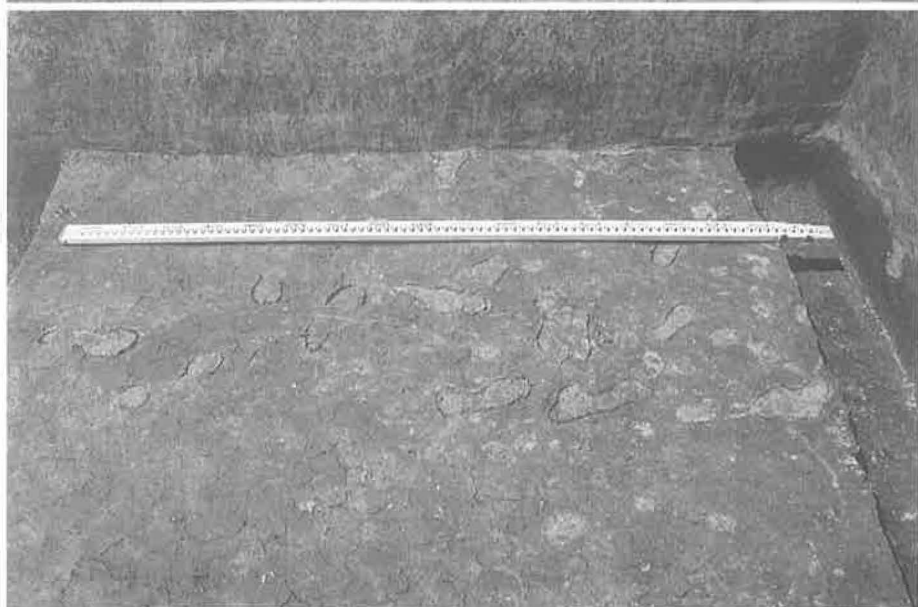
A地区  
近世遺構



A 地区  
中世遺構



B 地区  
東壁断面



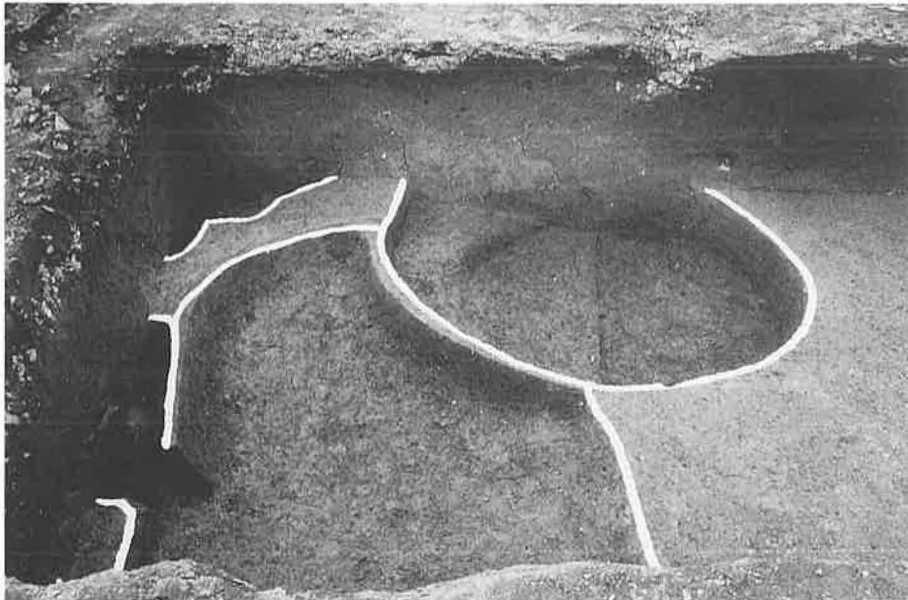
B 地区  
足跡



B地区  
遺物出土状況



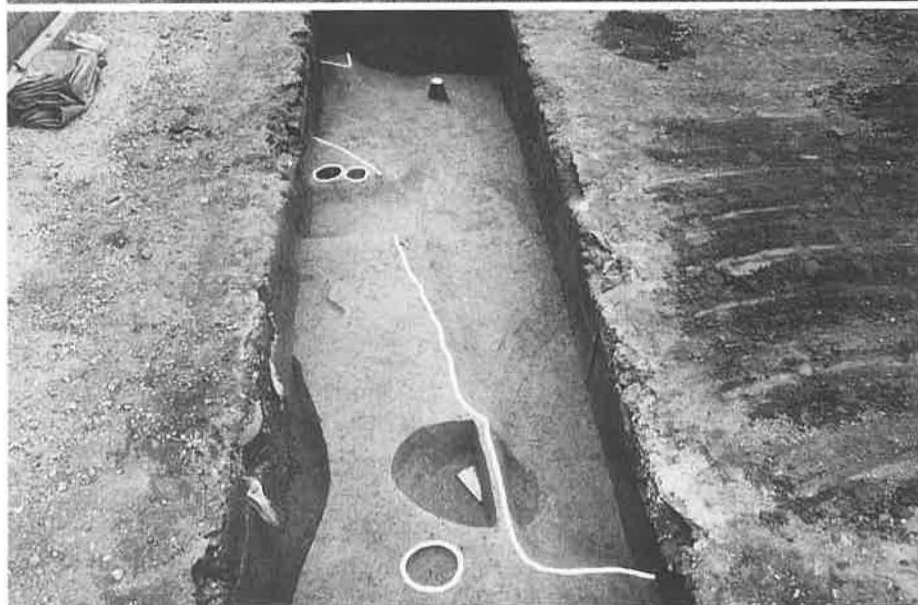
B地区  
遺物出土状況



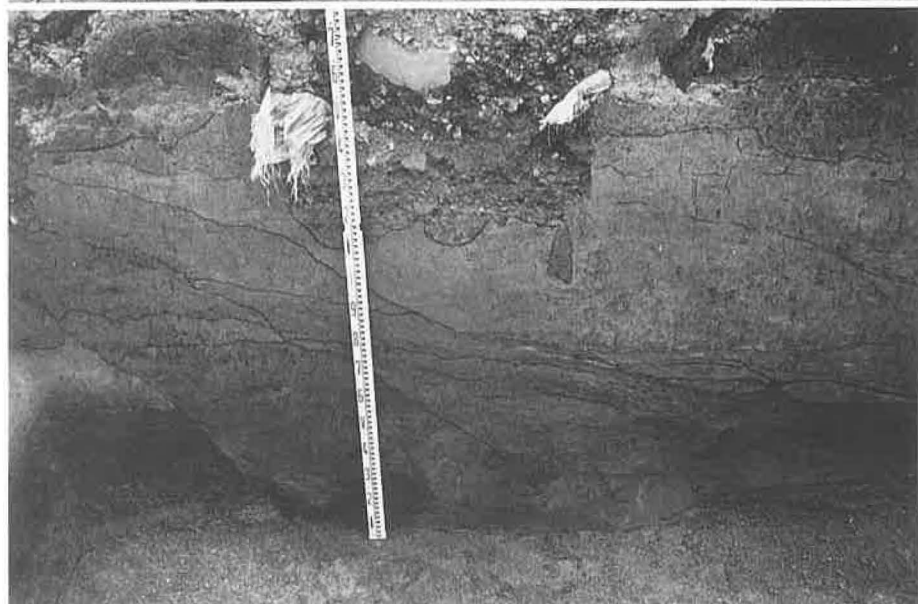
C地区  
中近世遺構



C地区  
土壙1



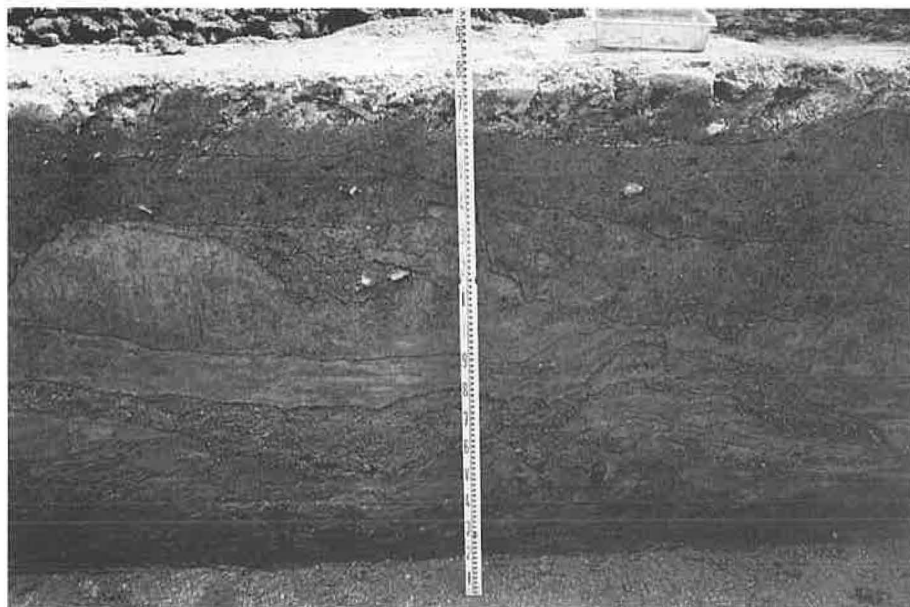
D地区  
中近世遺構



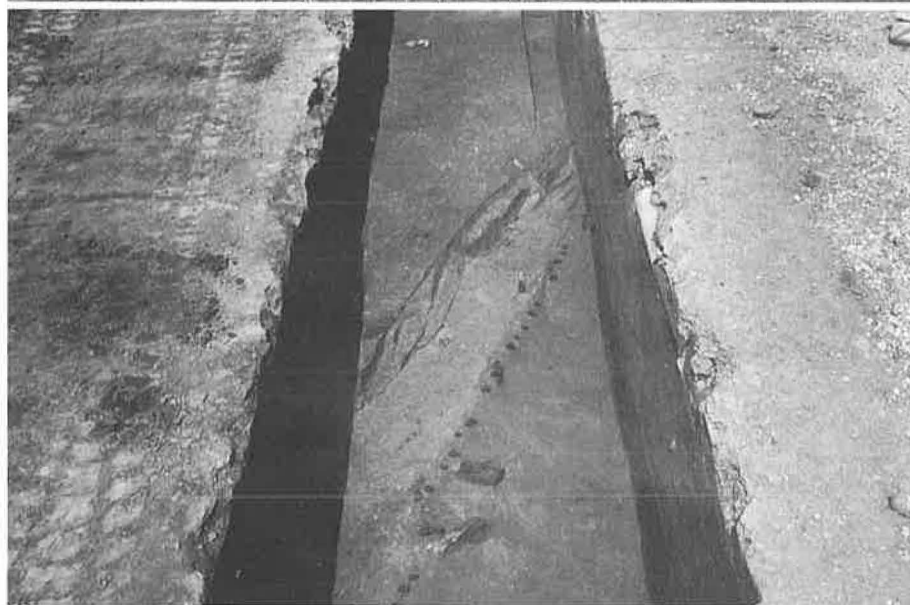
D地区  
東壁断面



図版5  
遺構



D地区  
東壁断面

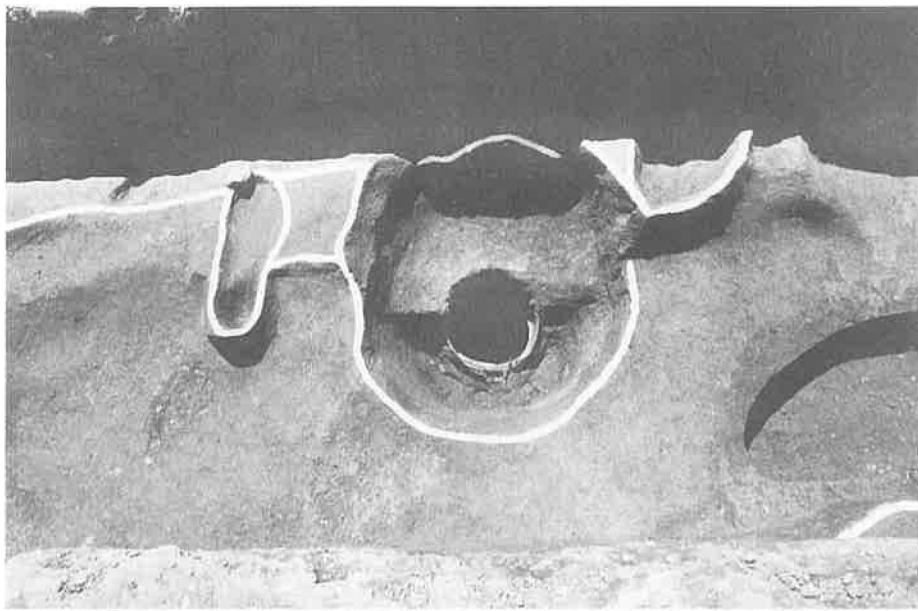


D地区  
溝4



D地区  
杭列

E 地区  
中世遺構

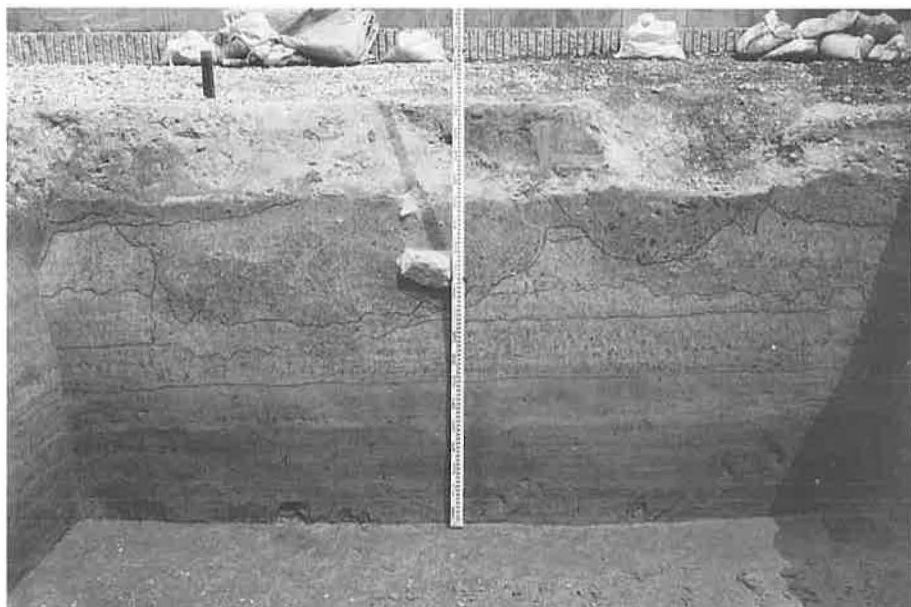


E 地区  
井戸 1



E 地区  
井戸 1 断面





F地区  
東壁断面



F地区  
近世遺構



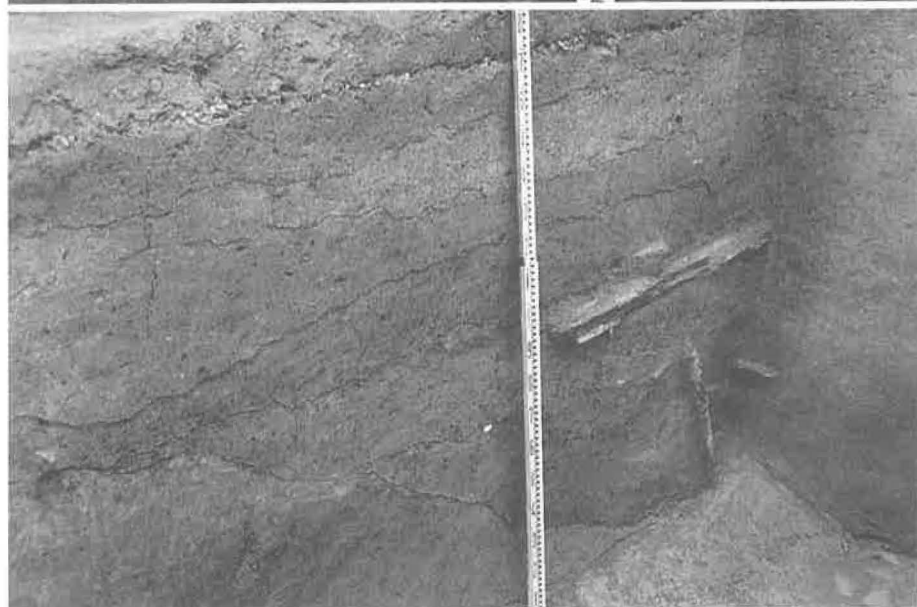
F地区  
井戸1断面



F 地区  
杭列



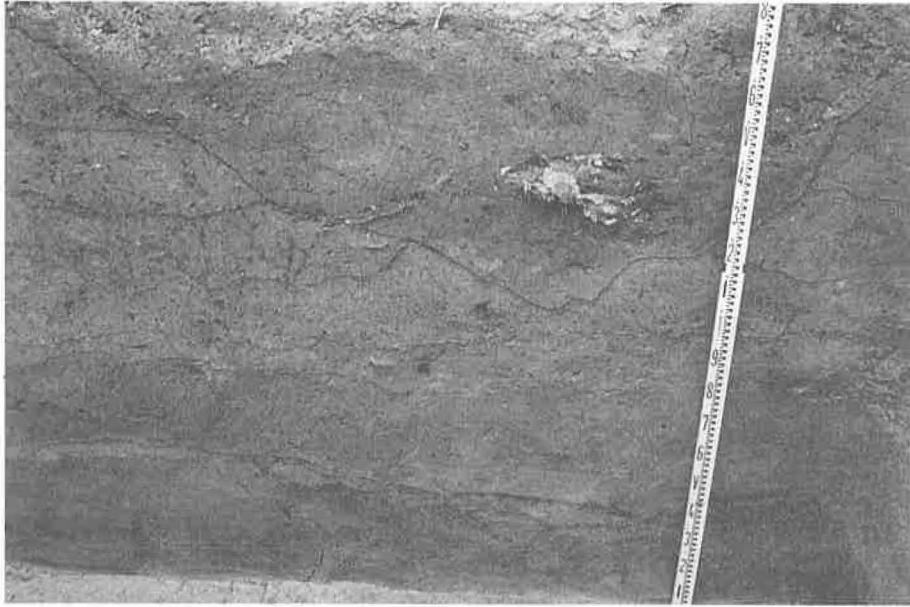
F 地区  
杭断面



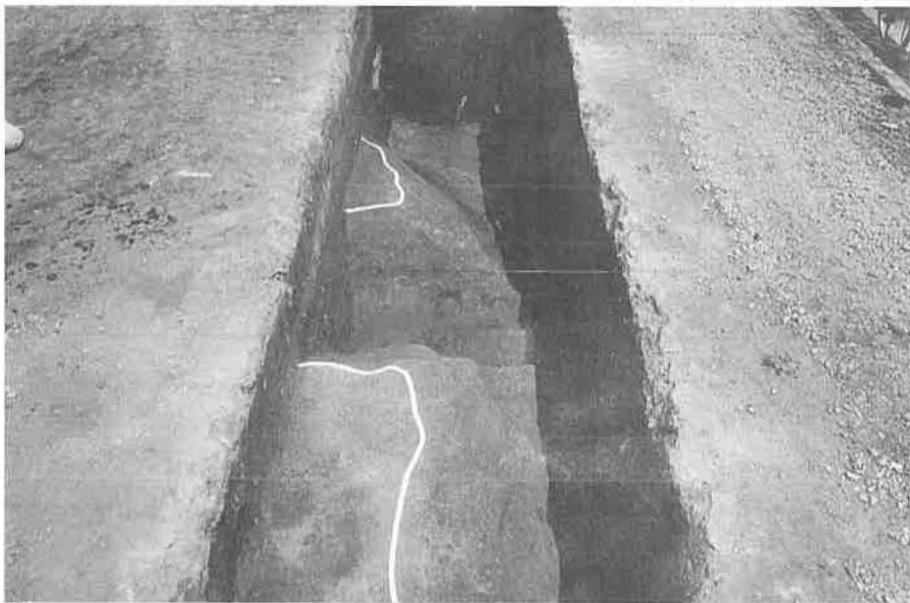
G 地区  
東壁断面



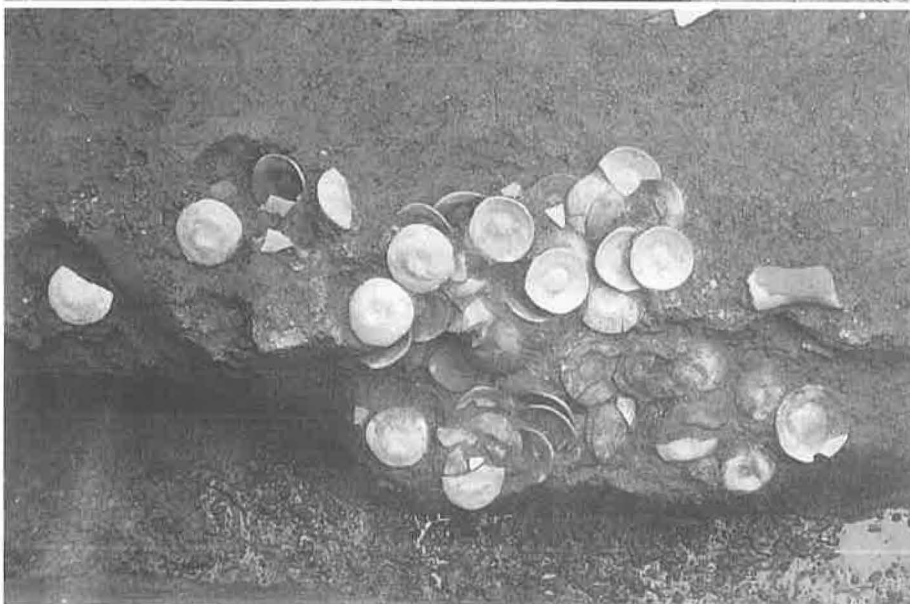
図版9  
遺構



G地区  
南壁断面



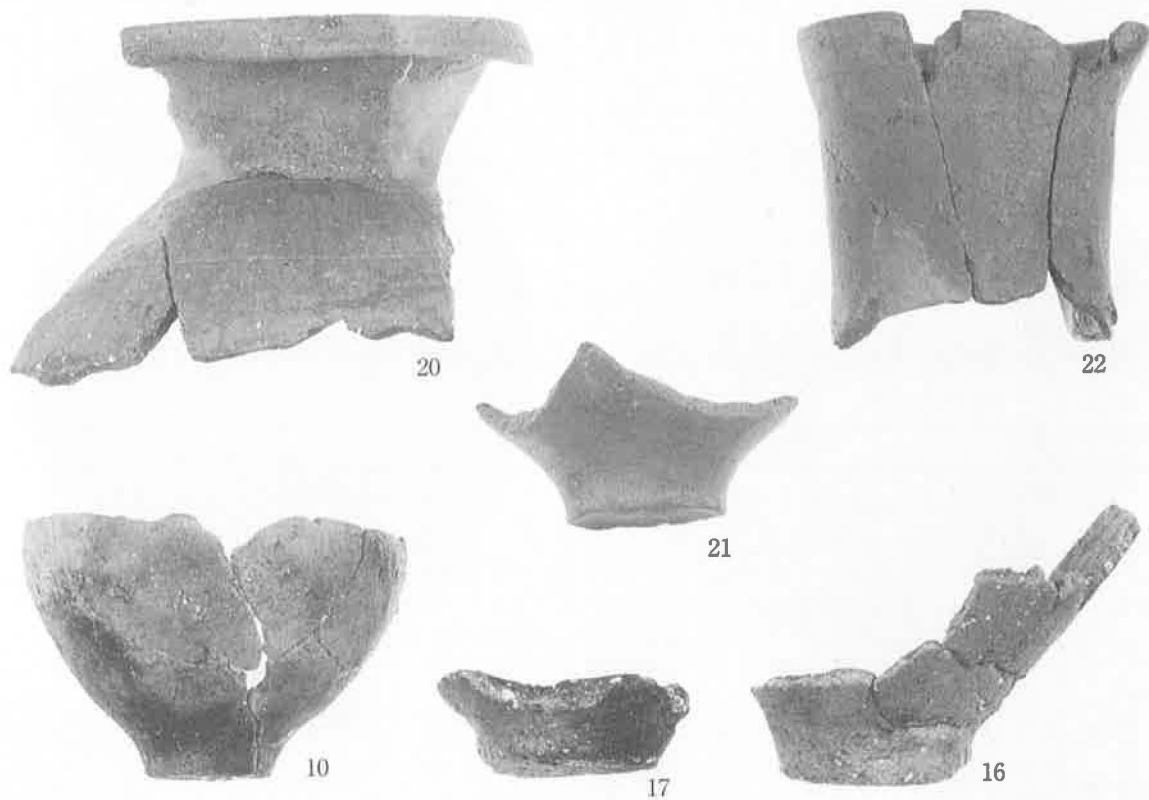
G地区  
中世遺構



G地区  
遺物出土状況



A 地区出土土器



B 地区出土土器

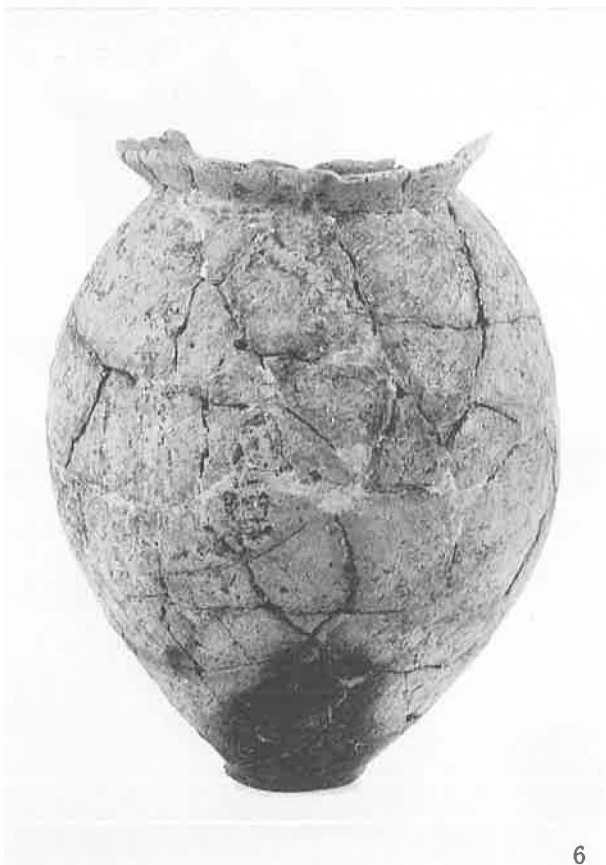
図版11  
遺物



8



9



6



13

B地区出土土器



11



14



12



7



15



19



18

B地区出土土器

図版 13  
遺物



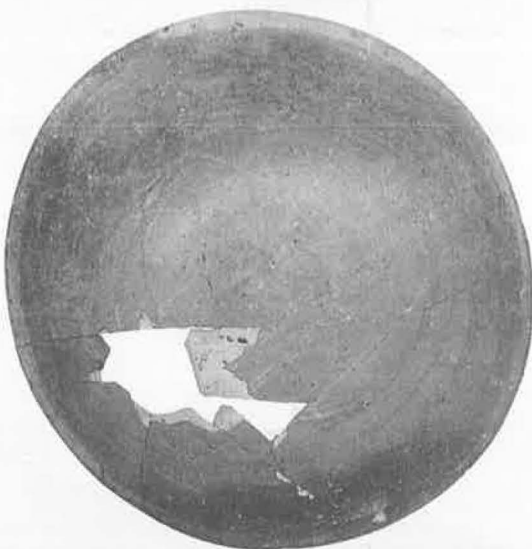
23



24



26



28

C地区出土土器



29

30



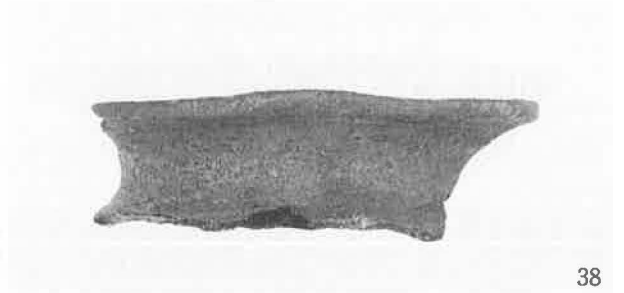
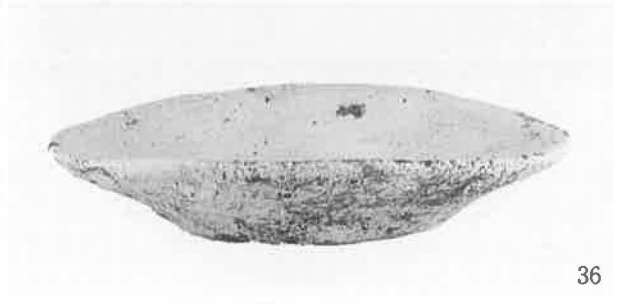
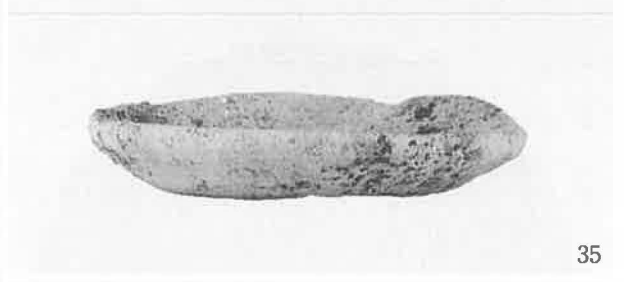
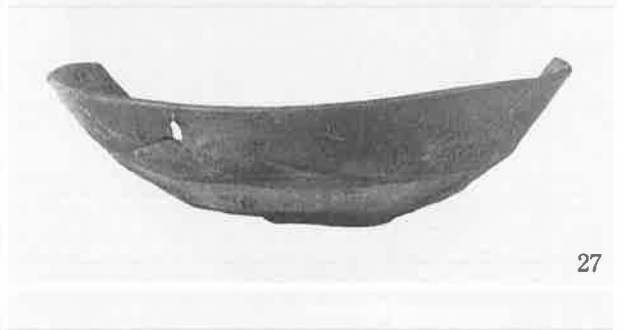
31

32

C地区出土土器



图版15  
遺物



C·D地区出土土器



40



41



42



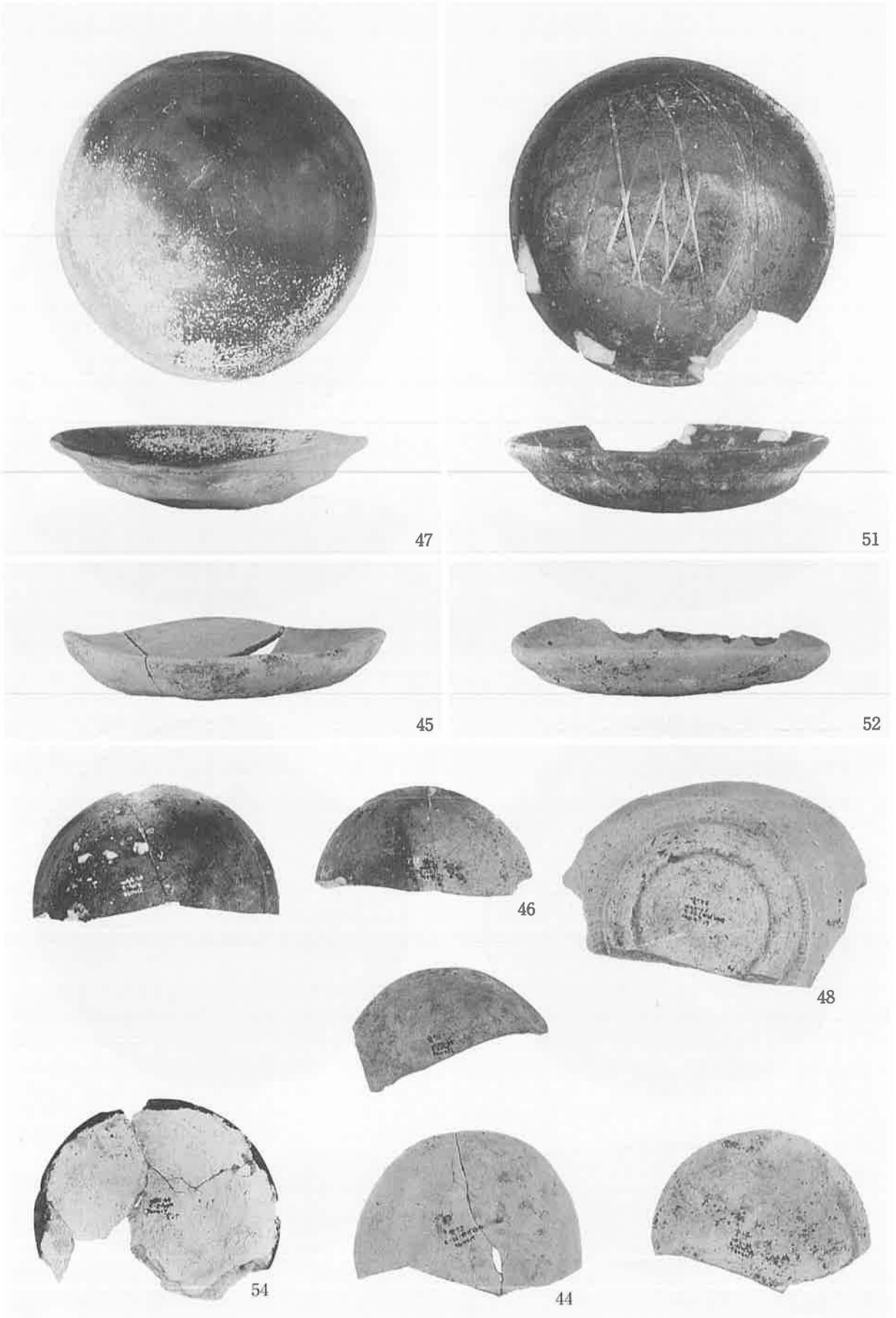
43



E地区出土土器



図版 17  
遺物



E地区出土土器



49



53

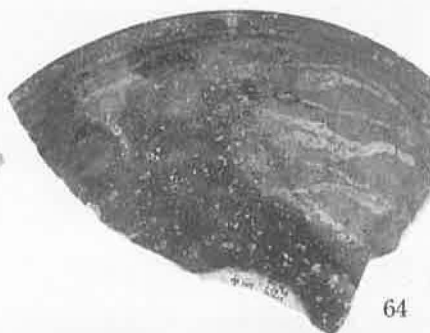
50



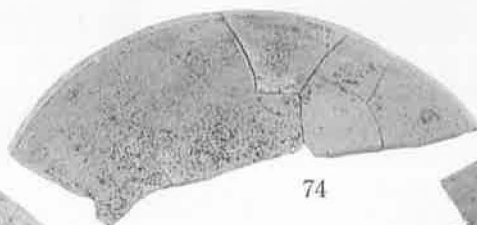
61



65



64



74



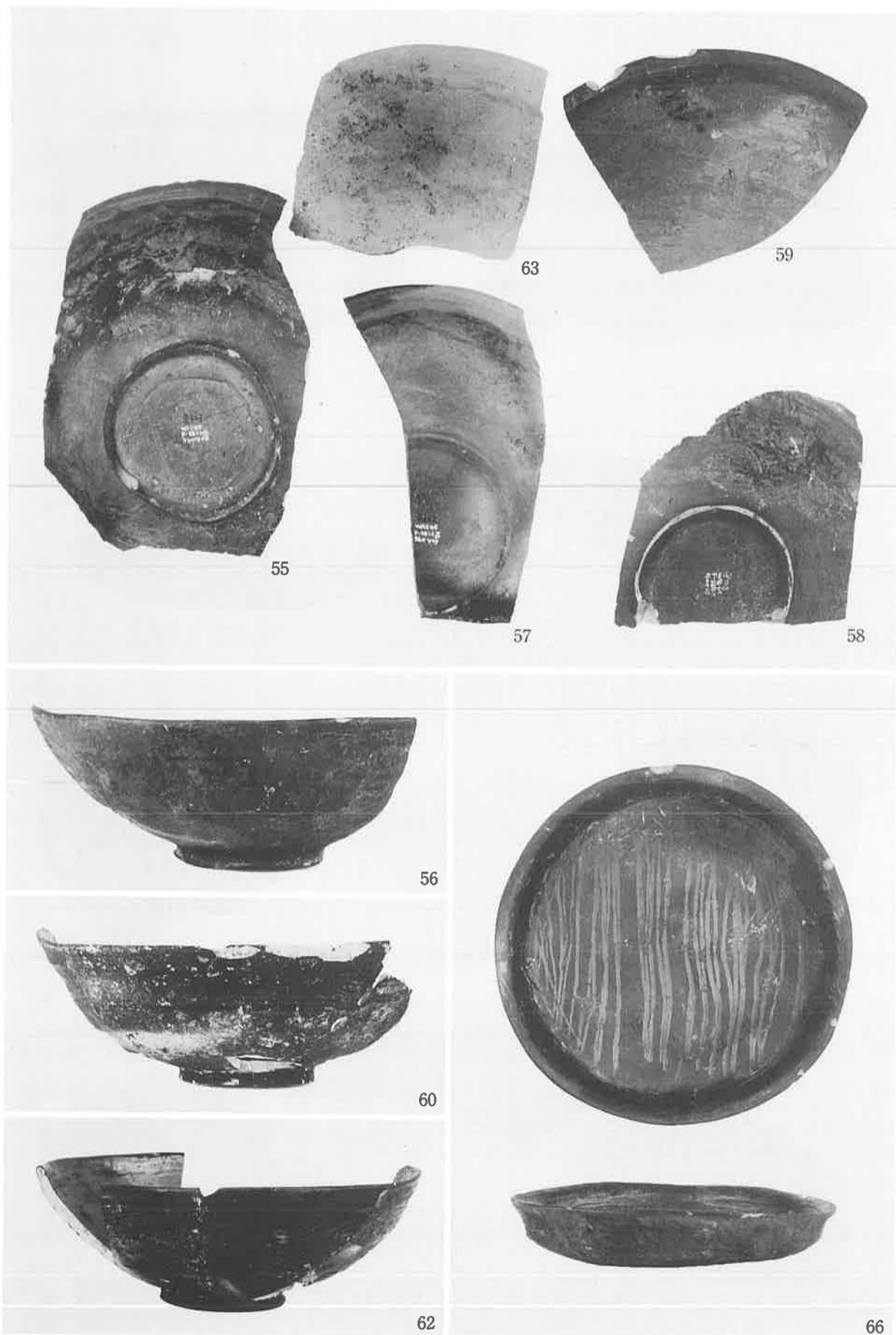
72



73

E・F地区出土土器

图版 19  
遺物



F地区出土土器



67



68



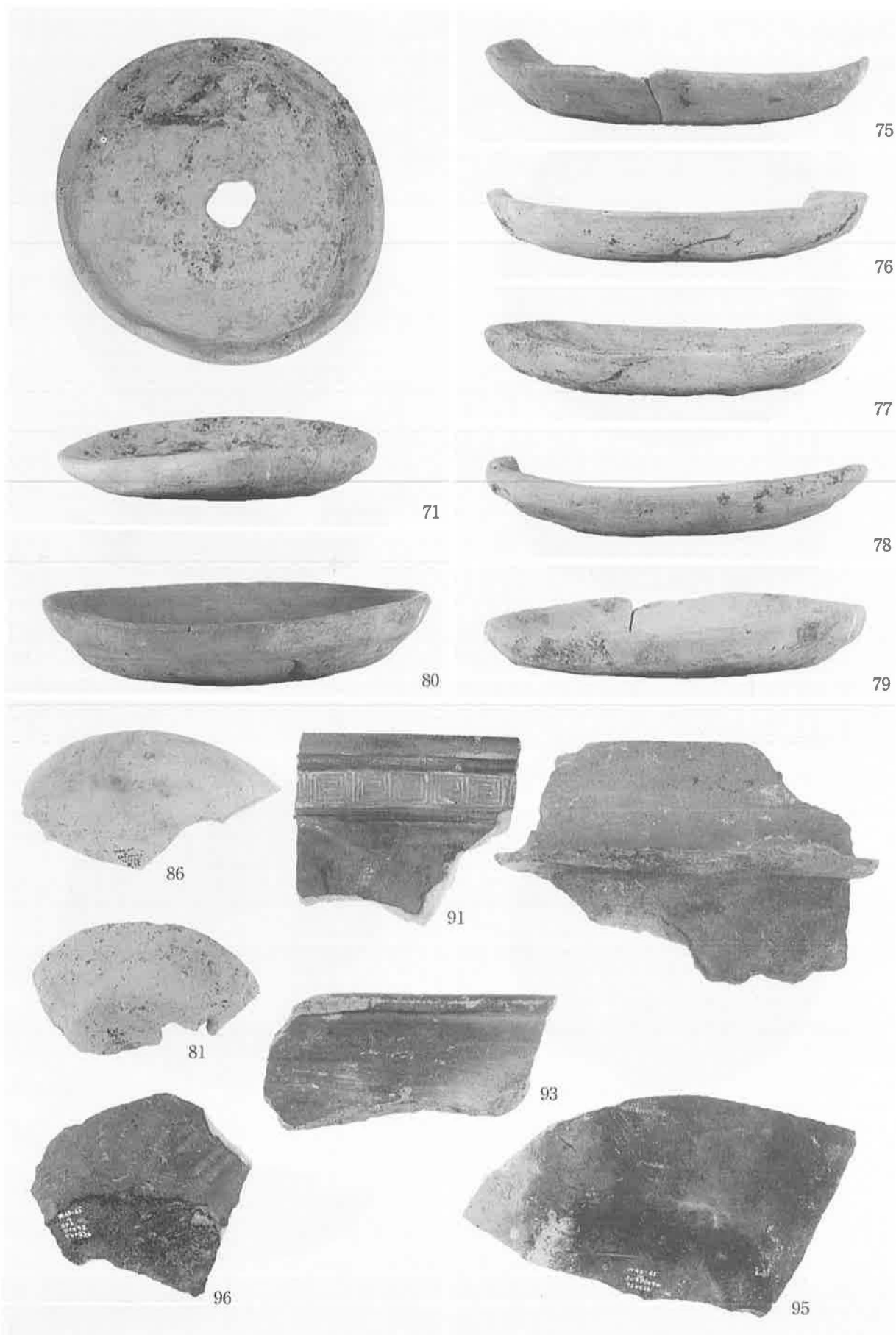
69



70

F地区出土土器

图版 21  
遺物



F・G地区出土土器



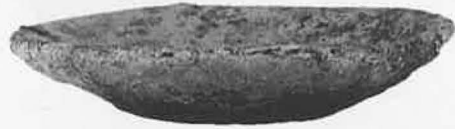
82



87



83



88



84



89



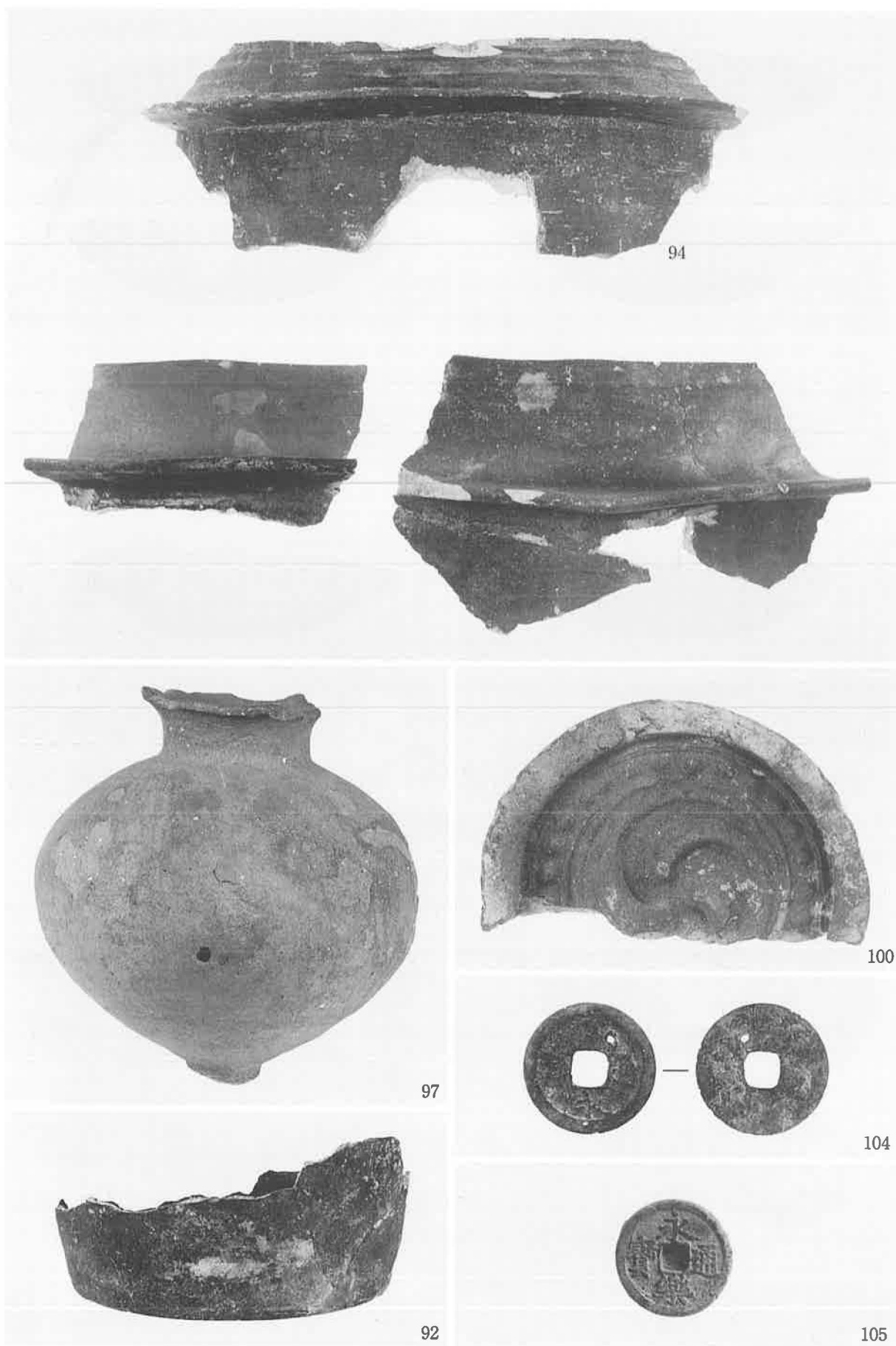
85



90



G 地区出土土器



G地区出土土器 瓦 銭貨 土製品

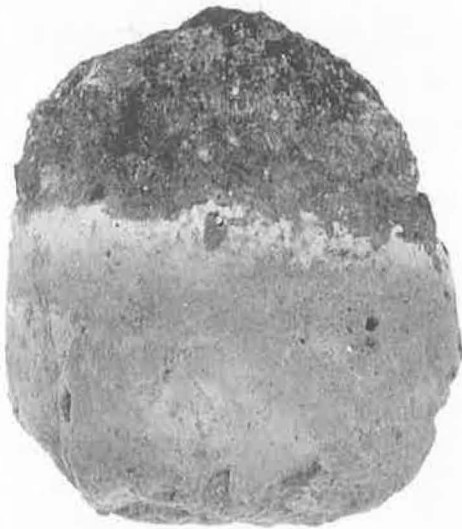




98



99



101



102



103



106

曲物 鞆 砥石 瓦 土製品



報告書抄録

ふりがな わかえいせきだい65じはくつちようさほうこく  
 書名 若江遺跡第65次発掘調査報告  
 副書名  
 巻次 シリーズ名 シリーズ番号  
 編著者名 井上伸一  
 編集機関 財団法人東大阪市文化財協会 発行機関 財団法人東大阪市文化財協会  
 発行年月日 1999.11.30 作成法人ID 42710 郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346  
 住所 東大阪市荒川3-28-21 ふりがな わかえいせき 遺跡名 若江遺跡  
 ふりがな ひがしおおさかしわかえみなみまち2ちょうめ58-2  
 遺跡所在地 東大阪市若江南町2丁目58-2 市町村コード 27227 遺跡番号 76  
 北緯 034.39.00 東経 135.36.14 調査期間 1995.04.03-1995.05.01 調査面積 80.6m<sup>2</sup>  
 調査原因 共同住宅建設  
 種別 城郭/集落  
 主な時代 弥生/古墳/中世/近世  
 遺跡概要 弥生後期-弥生土器/古墳-溝+足跡-土師器/中世-井戸+溝+土城+ピット-土師器+瓦器+陶器+磁器+曲物  
 +瓦+砥石+竈+土製品/近世-銭貨  
 特記事項

若江遺跡第65次発掘調査報告

1999.11.30

発行 財団法人東大阪市文化財協会

印刷 株式会社ミラテック